# 默魯庵漫録 第十三

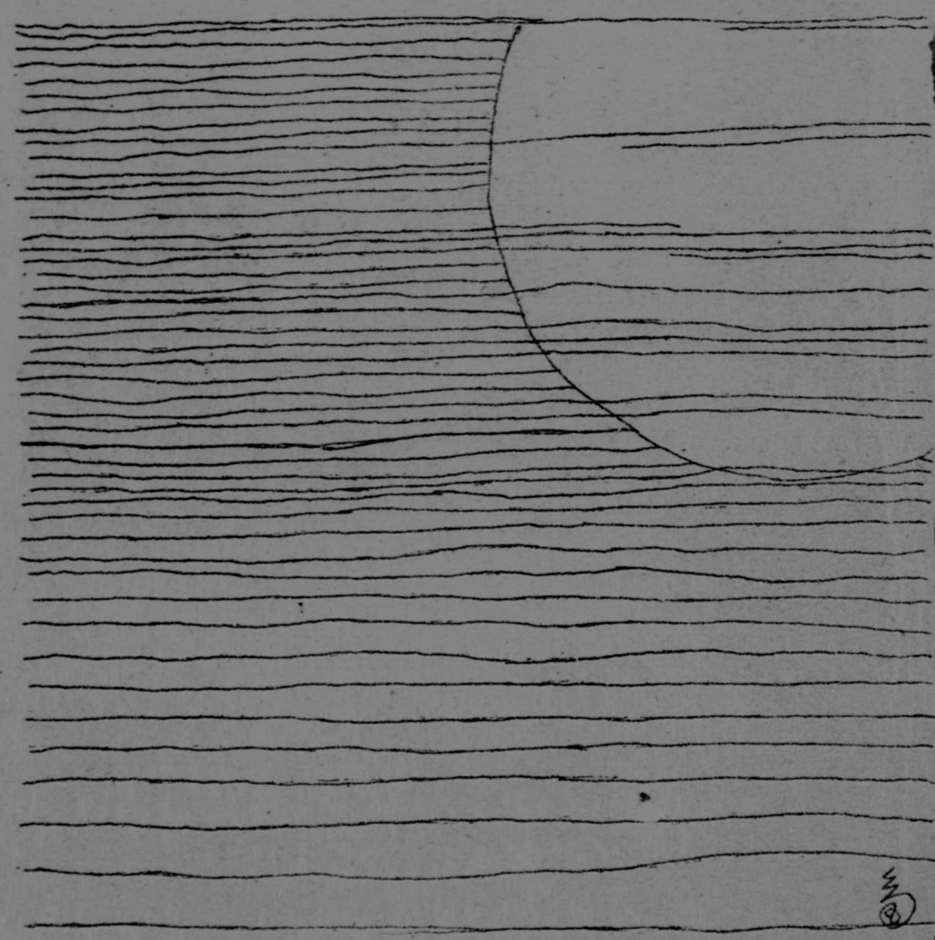
380.4
SH62

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第６７条の規定に基づき、平成１２年５月１５
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので

380.4
SH62

# んあろくも
# くろんま

三十いだ



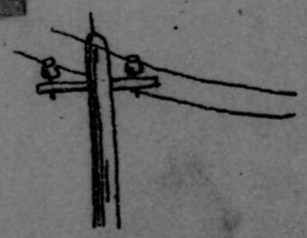
# 默魯庵漫録

第十三

内容　奈良の童謡

新藤広佐氏寄贈本

912
6

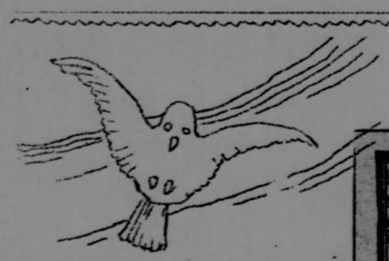


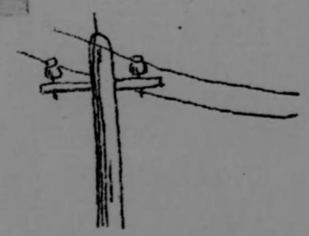
新藤和夫、德誠院和譽心經居士、
明治三十一年一月一日生、昭和三年二月十七日死、

新藤幽香里（ゆかり）、蓮月幽香童女、
大正十一年九月十八日生、大正十二年七月六日死、

此の冊子を作り終り弟と長女の事がしきりに
思ひ浮んで来る。
両人の靈前に此の冊子をさゝぐ。

912
6





新藤和夫、德誠院和譽心經居士、
明治三十一年一月一日生、昭和三年二月十七日死、

新藤幽香里（ゆかり）、蓮月幽香童女、
大正十五年九月十八日生、大正十二年七月六日死、

此の册子を作り終り弟と長女の事がしきりに
思ひ浮んで来る。
両人の靈前に此の册子をさゝぐ。

## 説明。

（號數は昭和八年八月十五日のもの）

△大和日報……奈良市角振町二、合名會社大和日報社發行、現政友會所屬代議士福井甚三氏經營、一ヶ月購讀料五十五錢、一三二六三號。

△奈良新聞……奈良市池之町、奈良新聞社發行、民政系の新聞、赤堀氏經營、一ヶ月購讀料五十五錢、一三三一九號、日報と同じく四頁、用紙は古くより薄桃色の物を使用して居るので赤新聞が通稱。

△大和旭新聞……奈良市三條今井町四四七、新愛知奈良支局、大和旭新聞社發行、三頁物、一ヶ月購讀料四十錢、新愛知と合せて八十錢、二九五六號。

△大和毎日新聞……奈良市小西町三十四、大和毎日新聞社發行、政友系、岩本正吉氏の經營、一ヶ月購讀料五十錢、三三九三號。

▨此の外奈良には三の新聞が有る、然し右の物は主な新聞で、大阪毎日新聞の奈良支局及大阪朝日新聞の奈良通信部では夫々一頁の奈良版を作ってゐる。



# 奈良の童謡

新藤默魯庵輯

本編は童謡の一般的研究とか、童謡の比較研究とか云ふ高尚な目的をもってやった事ではない。たゞへ網羅的に奈良の童謡を蒐め盡したとしても、夫れだけでは決してこんな大袈裟な事が言はれよう道理がない。然し地方の童謡を丹念に蒐めれば集める程童謡研究をやる一部の好資料となり得る事は確實だ。此の意味に於て奈良の童謡として從来より児童間に謡はれて居るものを、先づ列擧した迄過ぎない。其の範圍は私の幼少時から現在に至るまでの約三十年間にわたって居る。夫れだから現時の児童間には置き去りにせられたものや、私の一度も謡った事のないものも有る譯だ。歌詞の採集は私自身の古き記憶を呼び起こしたものや、路上に謡って居る児童から直接採集したものや、幾人かの特志者に依頼して其の人達の援助にもよった。又澤田四郎作氏著の「ふるさと」（奈良縣北葛城郡五位堂村のことを記せり）、崎山家左衛門氏著の輝く鄕土史（奈良縣高市郡眞菅村のこと記せる謄寫版誌）及び童謡研究會編の日本民謡大全（春陽堂發行）等は私の全く思ひ浮かばなかった童謡を回想せしめてくれたり暗示に役立ったので非常に喜しかった。尚類例を求めて幾分か比較研究の端緒とする便を得た事も忘れられない事だ。誌上簡單ながら謝意を表する次第で有る。

上述の事柄で殊更に辯明しなくてもよさそうだが、奈良の童謡と云へば二様に解釋出来る。即ち狹義の奈良特有の童謡と、廣義の奈良にて一般に謡はれる童謡との夫れで有る。本編に集めたものは其の後者に屬するもので有るから、當然其の内には前者の童謡も含まれて来る事は言ふ迄もない事で有る。夫れだと言ってどれ〳〵が夫れに屬するものだと、明確に指摘する事は甚だ難事で有ると言ふより外はない。

又童謡の流布の範圍に就いては、茲に一の童謡が有るとすれば、夫れが奈良市全般に流布して居るかどうかは一概には述べられない。或種のものは其儘奈良全体に行き渡って居るが、或ものは其の一部分が改変されて居たりし、又奈良の一局部にのみ限定されているものも有る。是は奈良は漸く中都市の仲間入りをした位の都市で有るが、其の地域は相當な廣さが有り、殊に南北に長く伸び地形上此の南北線は幾つかの丘陵・谷地が交互に存在して居る事に原因したり、人文的に住宅地區・商業地區・公園地區等の地區性質上の相違、又童謡歌詞の内容等に依る事であろう。

総じて童謡は児童遊戯と密接な関係を持って居る。従って遊戯中児童が稱ふる文句が纏のなさそうな片言にしても、抑揚などに一種の妙味が盛られて捨て難い点の有るものも有る。是等をも童謡として採録することにした。中には童謡としては不似合な寧ろ民謡とも稱すべき様なものもないではなかろう。夫れから民謡なり童謡には時々卑猥の如何を問はず卑猥な文句や言語の包含されて居るものだ。世の大凡の人達は殊に表面的には抹殺したり、或は其の箇所だけを伏字にしたりして取扱って居る。私は是等も其の地方の風習なり人情及び時代の思想変遷殊に児童の心理状態等を考察する有力なる資



料でなくてはならぬと信じ、所謂道義觀念などに拘束されず率直に是等をも掲出する事にした。夫れで或人達は私が好んで性の研究にのみ没頭して居るかの様に、又甚だしきに致っては私を一種の變態性慾者で有る様に誤認して居る様だ。熟察しない者で甚だ輕率だと云ふべきだ。

蒐集した童謡の數は相當の數で有る。従って是を掲出するに雜然と書くより何等の法により是を分類したほうが好いと考へられる。此の分類も時代別・季節別或は性質内容別等有るが、此處では最後の性質内容別に依る事にして、歳時唄・動物唄・遊戯唄等の十數項目に分つ事にした。次に夫等を順次書き記してゆこう。

（昭和七年十一月下旬）

## 歳時に関するもの

◎正月来たら何うれし、碁石みたいな、あも食べて、割木みたいな、とと食べて、

おこたへあたって、ねんねこしよ。

（註）碁石みたいなは普通で有るが、碁石みたよなとも言ふ。あもは餅、ととは肴、おこたは炬燵の事で、ととは魚の場合にも使ふが、大人が子供に對して言ふ時に限る。猿澤池へととかめさんを見に連れてあげましょう等は其一例だ。ねんねこしよは寝ましょうの意。

お正月は幾つ寝たら来るのかと子供は師走ごろになると何回となく母親に尋ね、正月の来るのを樂しんで待つ。其の待つ間もだまって居られない、餅も御馳走もたべられるし、紙鳶をあげたり羽子突きもして遊べるし、夫れに美しい着物、上等の靴もき

たりはいたり出来ると、もう心が浮き〳〵として唱はずには居られない。

奈良の町家は総じて（思ふと）て元旦日は寝正月と言って大戸ぶり戸をとだし潜戸を少し開けて名刺受けを小屏風などで取り囲んだ所に出して居る。

（類例）△正月きたら何うれし、わるきのよーなととたべて、お雪のよーなまま、（飯）たべて、こたつにあたって、ねんねこーよ。……奈良縣北葛城郡五位堂村のもの。

△正月きたら何嬉し、碁石の様なあも食べて、割木（わるき）の様なととと添へて、雪の様なまま、食べて、こたつへあたって、ねんねこーよ。……奈良縣高市郡眞菅（ますげ）村のもの。

△正月来たら何嬉しい、碁石の様なあも食べて、わる木の様なと、添へて、ねんじんみたいな、マラ出して、おこたにあたって、ねんねこーよう。……奈良縣高市郡眞菅村曽我。

◎二…正月つぁん〳〵、何處まで御座る、黒くやーま（山）の奥まで、さーあいとへ餅（もち）入れて、粉箱にこを（粉）入れて、ぶうらり、しゃらりお帰り、お帰りの道で、けん〳〵さんに出會ってちょーずえ隠れて、びっちぐそで滑って、かったぐそで鼻ついて、あゝ臭さや、ツン〳〵ツン、リンリのお嬢に子が出来て、負（おい）ても抱いても、よく泣くこを（子）やな、今度（こんど）出来たら、踏み殺そ。

（註）是は私の少年時に母より聞かされた唄で有った。私の家は元郡山町だった、し母も郡山の箕山の森山家から入嫁した人で有るから此の唄は言はば郡山のもので有り奈良でも一般に歌詞も相違なくうたって居たかうたって居るかは稍疑はしい。

さいとは餅搗時に使ふ盆の浅い平で廣い木製の円形器で一組全体の餅を此の中に入れ鏡餅なり押し餅を此の内にて作る。けん〳〵さんは狐、びっちぐそは軟い糞の意。



（類例）△正月どーん、どーこまで、くろく山の、すーそ（裾）まで、みやげなにな に、こーうじみかん、たーちばなの、さーきで、尾のある鳥と、尾のない鳥と、竹の筒、くわへて、きやーく〳〵と、泣いてるわ。……奈良縣北葛城郡磐城村竹之内。

△正月たん、どーこまで行くの、むこうの山のすそまで、ちょっとせんちへ、かーくれて、びっちぐそですべって、かったぐそで、鼻ついて——（等言ふ、まだ外の言ひ方も有る）……奈良縣高市郡眞菅村曽我。

△正月とん、どーこまで、くーろくやーま（山）の、すーそまで、おかいど、おかいどの道で、かんこんどんが出よって、（或はけん〳〵さんに出合って）、一寸ちんちへかーくれて、びっちんぐそで、鼻ついて、（或はびっちんぐそで、すーべって、かったんぐそで、鼻ついて）、あーくさや、つんぎやのおばさんに、豆とってもろて、此の豆たべたら、くさい〳〵（或はあーくさやつんとも言ふ）。……奈良縣高市郡眞菅村小槻。

（註）此處に有る豆（マメ）はどうも女陰の異稱らしい。

◎三…七草（なず）なづな、とーど（唐土）の鳥が、にほん（日本）の国に、渡らぬさきに、七草なづな、トン〳〵トン。

（註）是は童謡と言はんより民謡と言ふ方が適當で有る。

（類例）△七草なづな、唐土の鳥の、日本の国へ渡らぬ先（さき）に、七草なづなで、ストトントン〳〵トン。……長野縣（信濃国）佐久郡小縣地方。

△日本の鳥と唐土の鳥と、渡らぬ先に、ぽんがら、ほい〳〵……信濃国の鳥追ひ。

◎四…福は——内、鬼は——外（そと）。

（註）是も民謡に編入すべきもので殆ど全国的のものであろう。

●五……盆のぼたもち（牡丹餅）四十八くろて……（以下不明）

（註）是も前二者と同様民謡型のもので多分盆踊の時の唄だろう完結出来ないのが残念だ。

▲盆の牡丹餅や、三日置きや腐る、お婆これ見や、毛が生えた。……東京の盆唄。

●六……じゅうや（十夜）の晩に、重箱ひろて、あけてみれば、ほこ〳〵まんじゅ（饅頭）、握って見れば、じゅべえさん（重兵衛）のきんだま（睾丸）。

（註）私の子供の時分西包永町に住んで居た。近くに普光院なる浄土宗の寺で十夜念佛がつとまった。近所の子供が打ち揃って本堂で此の唄をうたった。色々さわいだ後柿だとか餅を貰って帰った。今東笹鉾町内の浄国院（浄土宗）では十夜念佛をつとめない。鳴川町の徳融寺では先般つとめた。

▲ぢうやの晩に、重箱ひろて、あけてみれば、ほこ〳〵まんじゅ、握って見れば、じゅんべさんの睾丸や……奈良縣北葛城郡五位堂村、十夜には藁でどんこを作って唄ふ。

▲月夜の晩に、重箱拾うて、握って見れば、十平はんのきん玉、開いて見れば、ほこ〳〵饅頭。……奈良縣高市郡眞菅村小槻。

▲亥の子、いの子の晩に重箱拾ろて、開けて見れば、ほこ〳〵饅頭、握って見れば、九平はん（或はじん平はん）のきん玉。……奈良縣高市郡眞菅村

▲月夜の晩に、重箱拾うて、握って見れば、十平はんのきん玉、開いて見れば、ほこ〳〵饅頭……奈良縣高市郡眞菅村小槻。

## 天氣及天象に關するもの



●七……お月さんなんぼ、十三一つ、（或は十三七つとも云ふ）、そらあ未だ若いなあ、今度きょうい（京）のぼって、まもりのぜぜで、おまんこーて、あげましょ、誰にあげよかなあ、三千世さんにあげよか、いや純坊にあげよ。

（註）なんぼは年が幾つか、そらあは矣れでは、きょういは京都へ、ぜぜは錢、おまんこーては饅頭を買っての意。此の唄は此處に掲出したが本来は子守唄で有る。老人が孫を守する時うたふ性質をおびて居る。まもりのぜぜの意は明確ではないが、身を守る錢と解して所謂臍くり金とか石塔がねと考へてはどうかと思ふ。誰にから以下はつけてうたふ事もうたはぬ事も有る。三千世は私の三女、純坊は三男の純彦の名で、今茲に假に入れたが誰の名を用ひてもよい。

▲お月さま幾つ、十三七つ、そりやまだ若いな、こんど京へのぼって、守のぜぜで、おまんを買うて□ちゃんと□ちゃんに、みなあげた。……大阪市

▲お月様幾つ、十三七つ、未だ年は若いね、紅鉄漿附けて、西へ西へと御嫁入りなさい。……伊勢のもの。

▲お月様幾つ、十三七つ、そりやまだ、年や若いな。赤い坊子生んで、白い坊子生んで、おこよに負はせて、油買ひにやったらば、油をこぼして、雪駄はなくす、狆と猿と買って来た。……長野縣（信濃国）南安曇郡のもの。

▲お月様幾つ、十三七つ、まだ歳や若いな、彼の子を産んで、此の子を産んで、お萬に抱かしよ、お萬何處行った、油買ひに茶買ひに、油屋の前で、滑ってころんで、油一升こぼした、その油どうした、太郎殿の犬と、次郎殿の犬と、皆な舐めてしまった、その犬どうした、太鼓に張って、鼓に張って、あっちを向いちやドンドコドン、此方を向いちやドンドコドン。……東京市のもの。

▲お月さん幾つ、十三七つ、まだ年は若い、七折着せて、おんどきよへ上しよ、おんどきよの途で、尾のない鳥と、尾の有る鳥と、けいつちいや、あらきいよう、と、鳴いたとさ。……志摩のもの。

▲お月さんなんぼ、十三九つ、そりやまだ若いな、油買うて上げようか、燈心買うて上げようか、油もぜんぜ(錢)、燈心もぜんぜ、ぜんぜ(錢)の中で、子一人設けて、お萬に抱せうか、お千に抱かせうか、お千もお萬も芋掘り往って、芋の臭にかぶら(噛)れて、遂死んだ。……石見の子守唄。

▲お月さん年なんぼ、十三七つ、まだ年若いなー。……奈良縣高市郡眞菅村。

▲お月さんなんぼ、十三一つ、まだ年若いな、今度京へ参って、あーまい買うて、しにませう。……奈良縣高市郡眞菅村。

◉八……一番星見付けた、二番星見付けた、三番星見付けた。

(註)是は夏の夕方屋外に涼みに出て居る子供の内誰かゞ「一星番星見付けた」と連呼すると他の子供達の鵜の目鷹の目で他の星を探し求め微かながらにピカ〳〵光る星のを見ると指さーながら「三番星見付けた」とやる。大低三番星位まで、夫れ以上は言はない様だ。

▲一ツ星めつけた、長者になァれ。……東京市。

◉九……雪やコン〳〵降ってくれ。

(註)奈良地方では雪の降ること珍らしい。よく降る年で三四回位で大雪だと言っても四五寸程度そーてぢきに消える。永くもって二三日位が關の山。從って大人でさへ喜ぶそーて雪見酒やとか公園へ雪見に出かける者が少くない。夫れだから子供と犬の喜ぶ様はたとへ様がない位だ。雪の少い所で有るのに雪の童謡が四つも有るのは少し変に思はれるかも知れぬが斯う考へて見れば成程と首肯出来るであろう。



▲雪やコン〳〵、霰やコン〳〵、お寺の松の樹に、一ぱい積りコン〳〵。……京都市。

▲雪やコン〳〵、あられやコン〳〵。……奈良縣高市郡眞菅村。

◉雪花散って来た、松の花さいて来た。

(註)是は和の子供時分にはなかったもので近頃の子供が言ふとのことだ。全体が二句になり、然も對句の体を備へて居る。雪と松、散ってに咲いて、而して美しい雪を花と見たて、居る。勿論雪が主体で松が從体だが、何故松を持って来たのか考ふべきだ。

◉十一……雪は一升(一しようとはうたはぬ)霰はご斗んごう(五合)。

(註)是は霰が主の唄で急に空一面が曇り寒氣がかはり、霰がパラ〳〵と降り出すと、子供達は言ひ合した様に、此の唄を歌ひ出し、前垂に受けとけて後にすくひ取り食ふ。前垂のせぬ子供は仕方なく両手に受けるが先づ一粒も入り難い。其處で前垂のない事が憾しそうだ。近頃の子供は大低男女共に洋服を着て所謂エプロンをつけて居るから、和の少時とは餘程おもむきが違ふ。母はよく言はれた。前垂をしなさい、そうして手を洗った時よがごれた時には着物でふかずに前垂でふきなさいと。前垂は重に紺物の布地だった。一升と五合は雪と霰との降る分量を比喩的に述べて頓る妙である。

▲霰こんこ、お寺の前に、一升五合たまれ〳〵。……新潟縣(越後国)新発田。

▲雪やコン〳〵、霰コン〳〵、お寺の梨の木にすっころこんと、とまれ〳〵。……同所。

▲雪は一升、あられ(霰)はごん合……加賀。(霰の降る時に唄ふ)。

▲あめー(雨)たんもれ〳〵や、みづー(氷)たんもれ〳〵や、りうぐう(龍宮)たんもれ〳〵や……福島縣(岩代国)會津　雪の唄でないが、句調の面白味で掲出した。

●十二…上見りやはーい灰)や、下見りやゆーき(雪)や。
(註)歌詞は簡單で觀察の微を旨く表現して居る。
▲天上見れば、煙のやうだ、うた(地上)見れば綿のやうだ……新潟縣(越後国)中蒲原郡。
▲天上見れば灰だ、中見れば綿だ、下見れば雪だ……新潟縣(越後国)新発田。
▲天な灰やたつ、下にや雪や降る……石川縣(加賀国)。
▲上は灰々、下は雪々……滋賀縣(近江国)。
▲雪はチラ〳〵、雲は灰だらけ……三重縣(伊賀国)。
▲雪花、ちーりばな、上見りや灰や、下見りや雪や……奈良縣高市郡眞菅村。
●十三…天狗さん、風おくれ、あまったら、かえそ。
(註)あまったらは残ったならばの意。
●十四…天狗さん、風おくれ、かぶら(蕪)三つと、かえことしよ。
(註)此の唄は幼時母から聞いたので、或は母の幼時に唄はれたものが記憶に存してゐたのかも知れない。夫れで有るなら郡山の唄で有る。私の子供仲間には唄はなかったが他の場所で唄つて居たかも知れない。考ふべきことだ。此の唄の内に蕪が入って居るが、天狗と蕪、或は風と蕪の間に何か言ひ傳えが有るのかしらん。ちょっと妙味の有ることだ。
▲天狗さん、風おくれ、風がなきや、ぜに(銭)おくれ……三重縣(伊賀国)。
●十五…ぢゞばゞ火の子、子供は風の子。
(註)只唄ばかりでない寒い風の吹く日でも頬なり手が赤くはれ上って居ても、子供は屋外で元氣よく遊んで居る事を見る。



▲ぢゞばゞ火の子、小供は風の子。……三重縣(伊勢国)。
▲ぢゞばゞ屁の子、子供は風の子……奈良縣高市郡眞菅村。
●十六…あ、寒ぶや、こーさぶ、猿(さーる)のじんべ、かってこい。
(註)冬季寒氣が嚴しく風さへ吹き添へると、無心らしく見える子供さへ寒さを切に感じて、屋外ので遊ぶ子供等は家へ入ろうとはせずに、此の唄を連唱して小走りに愉快そうに走り歩く。其の内に知らずしくに身体が暖くなる妙法だが子供は決して意識してやって居るのではない。かってこいは買って来いではない、借りて来いの意。じんべは綿の澤山入れられた羽織より短い袖なしの上衣の事を云ふ。
●十七…大寒むむ、小寒むむ、ゆんべの風は、おーついきこえて、やまと(大和)え、かえりませう。
(註)ゆんべはゆうべの轉化だが夕でなくて昨晩とか昨夜の意。おーついきこえては大津へ聞へてらしいが全体の意味が判然としない。
●十八…おかん、こをり、つめたい、こをり。
(註)氷の破片か氷柱を手にしてうづく様な冷さを感じた時に云ふ。おかんは阿母様の俗語、殊に下卑たる言語とせられて居る。事実見せないが、子供は萬事母親を慕ひ又相談相手で有る所から、お母さん是を御覧なさい、私は冷たい氷を持って居ります意でないかと思はれる。又別に氷の事をカンコホリ、カンコリと云ふ事が有るから斯うした童謡が生じたのでないかとも考へられるが少しうがち過ぎた考へ方ではないかと察せられる。
▲おかん、こほり、つべたい氷……靜岡市のもの。
●十九…雨か、天氣か。

(註)子供は是を唱へつゝ右足の下駄を空へ蹴り上げて表が出れば明日は天氣だと占ひ、裏が出ると雨、横立ちすると雪だと豫報する。一人がやりたすと幾人もやる。そゝて草履ばきの者もやる。

▲雨か、天氣か……奈良縣北葛城郡五位堂村。此處では雪の事を言はぬ樣だ。

## 動物に關するもの。

◎二十…朝早起きて、東の山見れば、さーる(猿)のけんけつ、まっかいけ。

(註)けんけつは尻の事をにくゝしげに言ふ方言。

◎二十一…むこうの山から、お猿が三匹とんで來て、まん中のこーざる(小猿)は、よくもの知って、鰻川え飛びこんで、なーまづ(鰻)一匹つかまえて、手でとーるもかーわいし、あーし(足)でとーるもかーわいし、蛇の目ですくって、蠟燭(燈心)でくくって、せんこ(線香)でいのて、井戸端へ持って行って、がっさがさと洗ひて、クックリとたいて、おーぢいさんに一きりと、おばーさんにもひーときり、あとひときり残って、とてもあげよなら、昭坊にあげましよ。

(註)此の唄は本来が一種の子守唄だが猿を唄って居るので此處に記したが後に詳記しよう。

◎二十二…前出…あゝ寒ぶや、こーさぶ、猿(さーる)のじんべ、かってこい。

◎二十三…雨のショボく、降る晩に、まめだが、とっくり持って、酒買いに。

(註)まめだは狸、とっくりは徳利の意。夏の夕に雨が降ると子供は是をうたい出す。



▲雨のショボく、降る晩に、まめだが、徳利もって、酒かひに……奈良縣北葛城郡五位堂村。雨あがりの夕暮に子供がうたふとの事。

▲雨のシビく、降る晩に、豆だま、とっくり持って、酒かひに……奈良縣高市郡眞菅村。

◎二十三…おんごろもちは、お宿にか、なーまこさんの、お見舞ひぢや。

(註)節分の晩に太鼓や空罐を叩きながら畑の周圍を何回となく廻ると、畑に鼠が未ないと信じられて居る。おんごろもちはむぐら老もちの方言。なーまこさんは不明。

▲おんごろ餅は家に来い、ドンドコドンの、お見舞ひぢや。(喫へざる時は)こゝの家は吝嗇坊……大阪市のもの。

蠟燭貰ひとて節分の晩、児童等鉄(ぶき)の空罐を敲きつゝ歩く。

◎二十四…こーもり(蝙蝠)こーい、ぞーり(草履)やろう。

(註)奈良では夏の暮蝙蝠の飛ぶのを見る事は稀で有る。私の子供の時は夫れでも時折には見受けた。其時は直に自分のはいて居る草履なり、緬切れを丸めて空に投げると蝙蝠は獲物と思ってかヒラくと夫に飛び付くのを見て喜んだが今は見受けぬ情景となった。

▲蝙蝠々々、草鞋やるから早く来い……下野國のもの。

◎二十五…さーきの鳥、あーとになれ、あーとの鳥、さーきになれ。

(註)鳥が何羽か飛んで居るのを見た時にこう唄ふ。

▲あとの鴉さきになれ、さきの鴉あとになれ……京都市。

▲後の鳥さきんなれ、さきの鳥あとんなれ……新潟縣(越後國)中魚沼郡。

▲後の烏が先になったら、鼓太鼓に扇一本くれる〳〵……新潟縣新発田町。
▲あとの烏やさきになれ……石川縣(加賀国)
▲あとの烏先に立て、我が家が焼ける、杓一本買ふちやるけ、早やう往んで水ぐう掛け……島根縣(石見国)。
●かーらす、からす、勘三郎、おーや(親)の恩をば忘れるな。
▲烏かん三郎、かりかのかり代衣、かったか〳〵……滋賀縣(近江国)長濱町。
●とりは食っても、どり食ふな。
(註)とりは鳥で一般に通じるが、食用の鳥として鶏が最も普通だから、鶏の料理の時によく言はれる。どりは鳥の肺臓で有る。是は童謡らしくない。
●二十八……とかーけ、指かんだ、とかーけ、指かんだ。
(註)蜥蜴を見付けて指さしをすれば其の指が腐り落ちると言ひ傳へて居る。処が誰でもよく指さすものだ。夫れで腐らぬ前に指をかみ落したと云ふ意味で其のまねごとをしながら唄ふ。唄は大低二回連唱で終る。
▲とかけの指や腐れ指、己らの指や金指……東京市。
▲蜥蜴指噛んだ、〳〵……京都市。
▲とかげ、くつな、よんでこい……奈良縣北葛城郡五位堂村。
くつなは蛇の事。
●二十九……ホーッ、ホー、ほーたるこい、あっちの水は、にーがいぞ、こっちの水は、あーまいぞ、ホーッ、ホー、ほーたるこい。



▲ほーとーらす来い、〳〵、だーんこせ、結んだ、解いた、小枷にかけた、彼方の水は、甘ないぞ、此方の水は甘いぞ、竹の筒で、露呑ませう……石川縣(能登国)鳳至郡穴水村。
▲ホーミミ、ほーとら来い、あんたんばゞから、潜って来い、落るなや、落ちあれば、ごばんの三がいで……石川縣(能登国)鳳至郡穴水村。
▲ホーホー、ほーたるこーい、こっこっこい、あっちの水は、にーがいぞ、こっちの水は、あーまいぞ、ホーホー、ほたるこーい、こっこっ来い……奈良縣北葛城郡五位堂村。
▲ホータロポッポ、下い降りい、ポーポ、上の水は苦いぞ、下の水はあ甘いぞ、螢ポーポ……石見国のもの。
●三十……ホーホー、ほーたるこい、まっころこい、あんどのおかげえ、とーんでこい。
(註)母の幼時、大和の郡山では「まっころこい」の代に「たまむしこい」と言ったのだと語られた。利なども其の物を指して居るのでは有るまい。そうすると此のたまむしは螢の別名、地方名即ち方言で有ったのだろう。螢の火が所謂火の玉=人玉に似て居る所からひのたまむしとかひだまむしと初に稱せられたのが たまむしと略稱するに至ったのでは有るまいか。
「まっころこい」は「眞黒こい」の轉訛ではないか。然し是は意味をなさないが、螢よ此方へ飛んでお出、お前の居る所は闇暗で困る事だろうとの意を縮言したとも考へられるし、又「ほー。たるこい」の顔を受けてこいと自然的に言ったのではないかとも考へられる。「おかげえ」は「ほかげえ」(灯影)で有らねばならぬ。夫れで前意の解釋がコジつけでなく穏当に聞かれる。行燈なる文字否言葉の有る所は情趣が電燈や瓦斯燈或は洋燈等に比して一層深く

螢火との對照が至妙で有る。從って此の童謡は後代の作ではなく德川期あたりから傳唱せられたものでは有るまいか。然し是は好く推考すべきことで有る。

◎三十一…おんめ、はた(機)おれ、いったん(一反)おったら、やすましたろ。

(註)此は直翅類の「はたおりばった」の童謡で有る。和達子供の時には、はた〳〵と呼んだ。おんめはばはたおりばったを人格化し女性に見立ておうめにした詞で有る。

▲木綿織れ〳〵、一反織ったら、休ましたるわ…(奈良縣高市郡耳成村)。

◎きりーす、ちょん、こどもに、とられて、あほらし、ちょん。

(註)蓑蟲斯の喧聲を擬した擬聲歌で有る。きりすを捕へた喜びに唄ふ。「あほらし」は馬鹿臭いの意で全体の意味は、きりすよお前は俺の様な子供ぐらいに捕へられて馬鹿臭く思はないか

◎三十三…おーぢいさん、さーけ(酒)こー(買ふ)てこーか、うまいこーと、ちゃちゃらこけ。

◎三十四…つーづらさせ、かんこ(紙子の)させ。

(註)前同様に此の二謡も蟋蟀の擬声歌で有る。此の歌詞を鳴声に和してせゆしふく反復して唄ふ。

▲かっこさせ、つゞりさせ、針がなければ、かってさせ…(奈良縣添上郡東市村)

▲かっこさせ、つゞりさせ、寒さが来るぞ……(奈良縣山辺郡丹波市町)

◎三十五…いも虫、ころ〳〵、はーし(箸)にさして、ころ〳〵、あーと(後)の長吉、ちょっとこい。

(註)是は蒲戯唄で單純な動物唄ではない。

▲芋畏ごうろごろ、山椒畏ごうろごろ、瓢箪ぼっくりこ、後の〳〵、先次郎、何用でござる、ゆうべ(夕)の牡丹餅どうした、棚にあげて、鼠が引いた、その鼠を持って来い(木の葉か何か持って来る)、そんな鼠があるものか……東京市のもの。



▲芋畏ごろ〳〵、あとの〳〵、先次郎、ゆうべ(昨夜)の鳥には、何呉れた、かい餅搗いて、呉れました、それはよくした、先に立て…(長野縣「信濃国」上諏訪)。

▲芋畏ごうろごろ、うしろ(後)の長吉、ちょいと来い……伊勢の四日市。

◎三十六…ほんやまこーい、あっちやおんた(牡)、こっちやめんた(或はこっちやめんちや)。

(註)ぽんやまはぽんやんまの事、めんたは又はめんちやは牝の事、方言だがめんたの方が多く用ひられる、人の女にも侮蔑的に使用されるが主に動物に用ふ。此の唄はやんまつりにうたわれる。

▲とんぼこーい、酒のまそ、酒のさかなに、何喰はそ、くちなの干ぼし、かへるの干ぼし……奈良縣(大和国)宇陀郡三本松村。

▲やんまのめんちよ、あともどれ……奈良縣山辺郡丹波市町。

▲赤とんぼ〳〵、よう飛ぶとんぼ、羽のないのは、とうがらし〳〵……奈良縣宇智郡。

(註)三本松のは多分とんぼつりの唄だろうが、後の二つはそうでない、參考までに掲げた。

◎三十七…しーろこどん、あまざけのまそ。

(註)晩秋の頃、鬱陶しい空模様になると、しろこと俗稱する身体に綿をつけた様な小蟲が軒端以下の高さにつゞ〳〵と飛び出る事が有る。其の時に子供は唄ってしろこを捕へる。

▲しろこどん、ござれ、甘酒飲まそ……三重縣(伊賀国)。

▲しろこどん、ござれ、甘酒のまそ……奈良縣(大和国)山辺郡丹波市町。

◎三十八…でんでん、つの(角)だせ、やり(槍)だせ、お寺の庭はけ。

(註)でんでんは蝸牛のこと。子供は蝸牛を捕へきて椽などに置き觸角を出して爬ひ出すと

喜んで唄ふ。

▲だいろう(蝸牛)、によ〳〵、角だせく、角ださねば、お寺の鐘に持って、ちょき〳〵、しましよ、しましよ……新潟縣(越後國)新発田町。

▲でんでん、むしむし、角出せ、槍だせ……奈良縣(大和國)北葛城郡五位堂村。

▲でん〳〵、むし〳〵、つのだせ、やりだせ……奈良縣(大和國)生駒郡龍田町。

◎三十九…でんでんむし、でん〳〵、かんこいく、かんこくさい。

(註)此の唄は私の子供の時にうたったものでない。

◎四十…たにしよ〳〵、われどこど、わたしは水田の中ですよ、一匹二匹とひらわれて、よつめのかごへと、入れられて、川でざぶ〳〵、あらわれた……奈良市郊外の大安寺村大安寺。

◎四十一…たにし取りが来たわいな、戸も障子もしめやんせ、しめてもかなんわいな、家ぐち持って行く……右のものと同所。

(註)われは我ではない、お前とか君の意。家ぐちは家ぐるめの意、即ち家全体のこと。大安寺村は奈良市の西南に位して境界を接して居る。従って奈良市の都市計畫地域内には包含されて居るが現在は奈良市に編入はされては居ない。夫れで此の童謡二つを特色も有りする點からして此處に收録する事にした。

大安寺村内は総体土地が低濕で水田が多く(他方では)大抵二毛作を行ふのに此村では本毛のみ作る。従って田螺の好繁殖地で有る わけだ。夫れで大安寺の小学生達は餘暇を利用しては田螺拾ひに出掛け、是をむいては朝の登校前の時間を利用して二三人隊を作り奈良の南部の町々を売り歩くので有る。 早朝「たにしョーう、



たにしッ」「たーにしはいりまへんか(或はいりままへんけ)」と聲を揃へたり、時には交互に唱へて売り歩く彼等の姿を見る時は、いじらしくもあり哀又は微笑の未来を好もしくも感に打たれる。

## 植物に関するもの。

◎四十二…牛出よ、馬出よ、太鼓出よ。

(註)私の子供の時は奈良市西包永町に長く住んで居た。恰度私の家の前には佐保川天満宮俗に草天神と稱するお宮が有って、其所には三抱えも有る二本の松の大木が有り今も立派に繁って居る。近所の子供達が此の松の周囲に集って、幹を此の唄をうたひながら小さな手でペタ〳〵と叩いては、松の樹皮を注意深く剥ぎ採り、色々な形の出るのを喜んだ。

◎四十三…牛出よ、馬出よ、太鼓持って、飛んで出よ。

(註)此の唄は私の知らぬものだ。近く或る中学生徒から聞き得たもので、やはり前唄がもと変形したものと考へてよい。牛なり馬の形をした皮が有りそうだ。然し此の唄に何故太鼓をつけ加へたのだろうか。皮を採るため平手(主に)ポリ又は握拳で打つ、敲く其の動作が恰も太鼓を敲く事に似通って居る點からして太鼓ポる言葉を畢に附加した過ぎないと考へてよいだろうか。

◎四十四…ふわく〳〵柳、折れたら樫の木。

(註)棒か板の物に寄せかけた上、又は木の枝の上に子供が上って足に力を入れて何回か踏み張り、ふわり〳〵とゆすりながら此の唄をうたふ。

◎四十五…ぢわんぼうの柿の左ね。

〔註〕ぢわんぼう、ぢぶちん、けちんぼう、ぢぶんち、いづれも吝嗇家のこと。然し唄にはしわんぼうの外は使はない。一人の子供が他の子供に持って居る物の何かをくれないかと言った時に此の唄を連唱する。

◎四十六…桃栗三年、柿八年、柚は九年の花ざかり。

〔註〕九年で花ざかりの意味だが其様には唄はない。

△桃栗三年柿八年、柚は九年でなりかゝり、梅はすいとて十八年……東京市のもの。

◎四十七…いっちん、かっちん、かーやの實、食われんものはどんぐりや。

〔註〕いっちんは一位樫の實の名稱、木の時は一般にいっちんのきと云ふ。かっちんは樫の實、どんぐりは櫟の實の事で有る。どんぐりの名稱は又餡玉にも使用されるが、どんぐりなる名稱は櫟の實がもとで、餡玉は櫟の實に似て居るからどんぐりと稱へるに致ったものだと考へられる。一位樫は奈良公園に老大木が諸所に在って公園の特種風景を現出して居る。奈良公園を愛賞する人は是を見逃す事が出来ない。從来實の熟してポロくこぼれ落ちる頃には町の子供は言ふに及ばず、大人まで風呂敷なり袋をさげて拾ひに出かける。樹下に集ふ数人の子供は瓦礫を抛り投げ実をかち落す、そう志た狀情景に接する事は珍らしくはなり。鹿が落実を漁り食ったり、御蓋山より群をなして野生の猿が枝から枝に飛び廻り、いっちんをむさぼり食ふ様は何處を探し求めても決して見得られる光景ではない。町の小さな菓物店にいっちんのはかり賣するものも有る。一般に此の実をいって食ふ。特に甘いと云ふ程でもないが、一種の風味が有り捨て難い。



又寝小便をする子供に食はせばよいと言って薬餌として用ひる。從って此の重論は恐らく奈良特有のものと所論してもよかろう。

◎四十八…いがやのとなり、かわや(皮屋)のとなり、しぶや(渋屋)のとなり。

〔註〕子供が栗を食べる時に唄ふ。又「しぶやのとなりに有るものなーに」と問ひにかける事も有る。誰かが「栗」と答へると、發問者が「そうそ」とほめる様な遊びをする事も有る。

◎四十九…龍田のもみぢ、手のよーあがるもみぢ。

〔註〕此のもみぢは楓の事でかへでは掌狀脈葉だから葉体が五ッ七ッ九ッと分岐して居る。それで子供が紅なす楓の落葉を拾ふと此の唄をうたって其の分岐を数へる。たったのもみぢと一字づゝ、葉によみあたへ恰度になれば七分岐の葉で有って子供は喜ぶ。「手のよーあがる」は何を意味するか明かでない。然し次の伊勢の唄と思ひ合せてみると文字を上手にかき得ると云ふ意が含まれて居るのではないかと想定される。子供の習字を見た親が「お前の手も大分にあがった、もっとしっかりやれ」と言って励ます事が有る。

△天々、天神さんの紅葉、手のあがる紅葉……伊勢国のもの。

◎五十…立てゝごんぼ。

〔註〕ごんぼの意味は不明だが、牛蒡(ごぼう)の事ではない。奈良ではごぼうの事を一般にごんぼと云ふ。此の唄はあけびの花を持ち遊ぶ時にうたふ。あけびの雌花の蕊を取り掌にのせて唄ひながら他の手(大低は右手で)で軽く叩きゆすると、蕊は掌中にピョコくと動く内、柱頭の粘液が皮膚に附着すると蕊は掌上に直立する。是が妙に子供を喜ばせる。

◎五十一…げんゞ、つーみ(摘み)に、い(行)きましょか、菜種の花のさくころに。

〔註〕げんげんはれんげそう。(蓮花草)のこと。四五月の頃暖氣に滿ち左野辺には、れんげそう、たんぽぽ、すみれ等が色とりどりに咲き揃ふと、子供の田圃に遊びたい氣持ちがーきりと某生へてくる。幼い男女の子供が四五人或は二三人手をひき合って此の唄を輕妙に節つけて愉快げに郊外に向ふのを見受ける。

## 子守に関するもの。

◎五十二……ねんねころいーち、寝るこーは可愛い、起きて泣くこー(兒)は、つらにーくい。

〔註〕ころいーちの意味不明。赤坊を脊負ふか抱いて此唄をうたひ、唄に合せて輕く足踏みをして子供を寝かせる。赤ん坊が寝る前にあーあーと輕い聲を出してむずかる。是をねどろを言ふと云ふ。こんな時に緩調にうたふと直に寝る。是には歌詞が澤山有る筈だが一々列擧は出来難い。次に其の内の一二を掲げる。

◎五十三……ねんねころいーち、ねる子は可愛い、親だすけ、起きて泣く子は面憎い……大阪市のもの。

▲ねんねころいーち、天満の市は、大根揃へて、舟に積む、舟に積んだら、何處行きやる、木津や難波の橋の下、橋の下には鶴が居よる、かもめとり左や網ほしや、あみがゆらゆら由良之助……大阪市のもの。

◎五十四……泣いて涙のでぬもーのなんぢや、芝居役者にきりーくす。

◎五十五……恋にこがれーて、鳴く蟬よりも、鳴かぬ螢が身を焦がす。

◎五十六……おつも、てんてんてん。



〔註〕おつもとは頭のこと。二三歳の幼童に簡單なしぐさを教へる其の一つで、此の唄を云ひながら子供の手を持って子供の頭を輕く叩かせる。是を何回か繰り返へすと今度唄をうたってやると子供は單独でもみじの様ホ手でぺちゃくくと額なり頭を二三回叩く。「ようー三千世さんはおつもてんてんが上手だこと」と言ってやると得意になってやる。

◎五十七……ちょちくく、あばばア。

〔註〕前の唄と同型のもの。但し其のしぐさが異って居る。ちょちくくで両手の掌を胸前で二三回打ち合わせる。ちょちくくとは拍子木を打ち合わせる時の音をちょんくくと言ふ様な擬音語で、此のちょちのちゃの響が幼童の手の打ち狀としっくり合った様な氣持がせられる。「あばばア」で右手の掌或は左のもので、「アーー」と連唱せる口を二三回ふさぐ様に叩く。時には單に「あばばア」のみをやり、或は前の唄と連續せしめて「ちょちくく、あばばア、おつも、てんてんてん」と言ふこともある。

▲ちょちくく、あワ、かいくりくく、とうと(鶏)の目、お頭てんてん、臀ぽんぽん……東京市。

◎五十八……去年のやーと、ことしのやーと、やーどし(同志)、ばぁーー。

〔註〕やーは又はやーこは赤坊のこと。赤坊を抱き合った左者が双方から此の唄を言って顔をつき合わせ、赤坊が嬉しがると何回か繰り返して行ふ。

◎五十九……隠れよーー、ばぁーー。

〔註〕唄らしくはないが子供の守には最も盛にやられることで有る。是は抱かれて居る赤坊に他の人が相手をする場合と、子供を抱いて居る者が赤坊を移動せしめて他の人を相手とする場合と、子守する者と赤坊と二人でやる場合の三つに分れる。顔を隠し或は帰

をするに小形の物を手に持つ時と、物蔭にかくれる時とに分たれる。

◎六十……とんどの雀は、あいくてもみくて、しばべや(薪部屋)へ、くっちゅ、くちゅ。

〔註〕とんどばたきびのことだが此のとんどの意は明かでない。あいの意も不明。もみは籾で殻をかぶった米粒のこと。此處のくっちゅくちゅは隠れるとか、すくむの意味に働いて居る。

此の唄は大人が四歳から六歳位までの幼童達をあやし可愛がりながら遊んでやる時にうたふもので有る。遊び方は子供の右手首を左手で軽く握り、右手で子供の右手の掌を唄につれて軽く叩き合わせ、しばべや辺になると腕をつたひ脇の下あたり手を入れて、軽くくすぐると子供はこそばく(くすぐったく)なり、クッくと笑ひ顔もっと〳〵とせがむ。すると子供の要求に應じて何回か繰り返し行ひ、其の内に子供の左手に移り変って彼等のあきるのを察知して遊んでやる一種の室内遊戯で有る。

◎六十一……今泣いたこー(子)は、やま(山)ん中の乞食、ちんちり持って走った。

〔註〕やまんなかはやまのなかの意。物乞ひはこつじきと言はわないで、こじきと云ふ。ちんちりはまつかさのことで稀にちんちりんともちんちろりんと云ふ者も有る。松蟲の方言は是に似て居るが少し違ふ。ちんちょろりんと云って擬声語で有る。

此の唄は子供が泣いた時に子供(四ー六歳位)の泣くのをなだめすかす意で云ふ。泣いたのは乞食か或は乞食の子で有って内の子はそんなみすぼらしい子でない、立派な子で有ると云ふことで子供に自尊心をつける唄で妙趣がもられて居る。次の伊勢の唄とは類型だが用ひ方に大差が有る。

▲今泣いた顔はせっちん(雪隠)の側で團子さして食ふとって、赤い顔して飛び出した…伊勢国。



▲今泣いた子は、雪隠の角で柿の蔕拾って、銭かと思って蜜柑買ひに走った…伊勢国のもの。

〔註〕此の両唄は文句からして全然悪口、嘲罵的で有る。奈良に於ても幾分こうした意味にも使用されて居る。前唄は伊勢の石榑地方の小児を見て他村の小児より嘲笑ふときの謡だと言われて居る。

◎前出……お月さんなんぼ、十三、一つ(十三、七つとも云ふ)、そらあ未だ若いなあ、今度きょう(京)い、のぼって、まもりのぜゼで、おまん(饅頭)こーて、あげましょ、誰にあげよかなあ、紙坊にあげよ。

〔註〕此の唄は天氣・天象の部に入れ又類例も其の場所に掲げて置いたが、唄の性質上からすれば嬰の子守唄に屬せしむべきで有る。

◎前出……むこうの山から、お猿が三匹とんで来て、まん中(眞中)のこーざる(小猿)は、よくもの知って、鯰がわ(川)え飛びこんで、鯰一匹捕まへて、手でとーる(捕へること)もかーわいし、あーしでとーるもかーわいし、蛇の目ですくって、瓢箪でおーさえて、とーしみでくくって、せんこ(線香)でいの)て、くっつくつとたいて、おぢいさんにひとき)て、甘戸端え持って行って、がっさがさとあろ(洗ふ)て、とてもあげよなら、昭坊にあげましょ。り、おばーさんにもひときり、あとひときり残って、と

〔註〕此の唄の内に猿、鯰が有るので動物唄の部に入れておいたが本来は子守唄に屬せしむべきもので有る。鯰川は鯰の棲める川の意で地名的ではない。かーわいしはかわいそうだからの意。蛇の目は蛇の目の唐傘の略ではないかと思ふ。とーしみは又とーすみとも云ふ燈心のことで有る。昭坊とは私の二男の昭彦の名を入れたので、誰れでも適當の名を入れるとよい。

▲山から山から猿が三匹飛んで来て(或はとんでってとも云ふ)、さきの猿は物知らず、あーとの猿も物知らず、まん中のこうざるが、ようものしって、なまずかはへ、飛びこんで、なまず一匹

へーさいで、云々……奈良縣高市郡眞菅村。

▲向うの山に猿が三匹止まって、前の猿は物識らず、後の猿も物識らず、中の子猿が、能う物識って、ござれ友達、花見に行こや、花は何處花、地藏の前の櫻花、一枝折ればパッと散る、二枝折ればパッと散る、三枝がさきに日が暮れて、何方の紺屋へ宿取ろか、東の紺屋へ宿取ろか、南の紺屋へ宿とろか、殿さんの紺屋へ宿取って、疊は短し夜は長し、曉起きて空見たら、ぎっこのばっこのきいせんご、船ども漂へて帆を掛けつ、帆掛船の吊り物は、白織、赤織、赤地の交った鍔刀……島根縣(出雲国)松江市。

▲向うの山の松の木に、猿が三疋止って、先の猿は物識知らず、後の猿も物知らず、一の中の小猿めが、大物識りで、何と友達花折り往かう、花は何處花、地藏の前の櫻花、一枝折ればパッと散る、二枝折ればパッと散る、三枝が迫って日が暮れて、前の紺屋へ宿取ろか、後の紺屋へ宿取ろか、中の紺屋へ宿取って、疊は狹し夜は長し、曉起きて空見れば、蓮花の様な化粧して、上から鳥がつつくなり、下から地藏がつつくなり……島根縣(石見国)の子守唄。

## 數に関するもの。

◎六十二……一で芋盗んで、二で逃げて、三で探して、四でしれて、五でごんぼでどつかれて、六で牢へ入れられ、少七で火あぶり、八ではりつけ、九で首吊り、十でとーく〳〵ねさまった。

〔註〕ごんぼはごぼう(牛蒡)のこと。

▲一で芋食うて、二で逃げて、三でさがして、四で縛られて、五でごんぼー(牛蒡)でたたかれて、六で牢屋へ入れられて、七で火あぶり、八ではりつけ、九で首くくり、十をでとう〳〵死んぢ



やった……栃木縣(下野国)上三川地方。

▲一で芋盗んで、二で逃げて、三でさがされて、四で知れて、五で牛蒡でどやされて、六で牢屋へ入れられて、七で火あぶり、八で磔殺、九で首吊り、十でとうど死んでしもた……三重縣(伊勢国)四日市市。

▲一で芋盗んで、二で逃げて、三でさがされて、四でしれて、五で御所へ連れられて、六で牢屋へ入れられて、七で七円のばーっきん、八で恥かいて、九で首つって、十でとう〳〵死んでしもた……奈良縣(大和国)北葛城郡五位堂村。

◎六十三……いちでたーわら(俵)ふんまえて、にでにっこりわらって、さんでさぁけ(酒)すくって、よっつよのなか(世の中)よいよーに、いつついつものごうたくを言ふ、むっつむみょーそくさいに、ななつなにごとないよーに、やっつやしきをひいろげて、ここのつこぐらを打ちこんで、とをでとっくりおさまった。

〔註〕酒のことを一般にさぁけとは言はない。唄だから此の様に言ふて居る。ごうたくは自慢とか自慢の意で通常「ごうたくを言ふ」と述べる。むみょーそくさいは無病息災の意で無病の事をむみょーと言ふことはない。悪く變じたもので有る。こぐらは小倉の意だろうが打ち込んでの意は不明で有る。廣なり擴はひろげると言って、ひいろげるとは言はぬ。

◎六十四……いちでいまきまくって、にでにっこりふりまらを、さんでさねぺこくと、しでしとてたまりません、いつついやでもせんならん、むっつむきまらさしこんで、ななつ泣くやら笑うやら、やっつやってるさい中に、ここのつこせがれ見やがって、とをでとう〳〵やめとこか。

〔註〕いまきは湯巻のこと。ふりまらとは褌か猿股をして居ない時のものを云ふ。さねは一般に小陰唇のこと云ふ。せんならんはしなければならないの意。むきまらとは一般には言はない。むけまらで有る。然しまらをむき、まらをむく、まらむく、まらをむけ、まらむけ等云ふ。こせ

がれ。は子怜で卑めた述べ方で有る。
此の唄は子供がうたふのだが、原作は子供では有るまい。本来は卑猥なる唄の部に入れるべきだが、数にも関係が有るから、茲にも記すことにした。

▲一でいーまきまーくって、二で三階へ上って、三でサネぺろ〳〵と、四でしいとてたーまらん、五つ今するところ、(或はいやでもせんならん)六つむけまらさしこんで、七つ泣き〳〵せんならん、(或は泣いたら笑ふたり)、八つ矢張せんならん、九つ子が出来て、十でとう〳〵しゃべられた……奈良縣高市郡眞菅村。

◎六十五……いちごに、にんじん、さんしょに、しいたけ、ごんぼに、むかご、(又はむくたけ)、なすびに、やまのいも、くわいに、とうがらし。
〔註〕むかごとはやまのいもの肉芽のこと。やまのいもはところ汁等に作るので農家では栽培するが野生のものがより一層精分になるとて一般に好む。此の物を特にじねんじょと云ふ。
此の唄は本来は遊戯唄で女児の羽子突の時にうたふ。

◎六十六……いちがさした、にがさした、さんがさした、しがさした、ごがさした、ろくがさした、ひちがさした、はちがさした、ぶん〳〵〳〵。
〔註〕八がさしたを蜂が螫したに通わせて居る。此の唄も本来は遊戯唄で有る。後出。

◎六十七……ひとつと出たわいな、よさホイのホイ、ふたつと出たわいな、よさホイのホイ、……。
〔註〕こうして数を進めてゆく。詳しきことはわからない。

◎六十八……一列だんぱん破裂して、二ち露戰爭始まった、サッ〳〵と逃げるは露西亜の兵、しんでも盡すは日本の兵、五萬の兵を引きつれて、六人残して皆殺す、七月四日の戰は、ハルピンまでせめ入



って、クロパトキンの首落し、とう郷大將萬々歳。

◎六十九……一番初めは一ノ宮、二で日光東照宮、三で讃岐のこんぴらさん、四で信濃の善光寺、五つ出雲の大社、六つ村々地藏さん、七つ奈良の南円堂、八つ八幡の八幡さん、九つ高野の弘法大師、十で處の氏神さん。

▲一に一畑お藥師様よ、二には日本の日光様よ、三に讃岐の金毘羅様よ、四には信濃の善光寺様よ、五つ江の島辨天様よ、六に六角堂の觀音様よ、七つ七浦の天神様よ、八つ八幡の八幡様よ、九つ高野の弘法様よ、十で處の氏神様よ、懸けた願なら、解かねばならぬ……東京市のもの。
〔註〕手鞠つきの唄。

## 卑猥なるもの。

◎七十……とって、ちって、た、とっと、へんずり、かっきょった。
〔註〕子供が軍隊の喇叭の譜をまねて唱へる事では有るが、是は元大人が作った言辞で有って子供の創作では有るまい。へんずりはせんずり轉訛で手淫のことで有る。

◎七十一……ぼゞしょ、ぼゞしょと、ゆうてる間に、夜があけたあー。
〔註〕子供が喇叭の調子にまねて唱へる。是も前註の如く大人の作だろう。ぼゞは女陰のことだが總じて下卑た言葉とされて居る。普通はおめこと云ふ。ゆうてる間は言って居る間の意。

◎前出……一でいまきまくって、二でにっこりふりまらを、三でさねぺこ〳〵と、四でしとてたまりません、五ついやでもせんならん、六つむきまらさしこんで、七つ泣くやらわらうやら、八つやってるさい中に、九つこせがれ見やがって、十でとう〳〵やめとこか。

〔註〕六十四参照。ぷりまらに對してふりぼゞが有る。是は湯巻をせぬ時のもの。又湯巻を志て居ない女子が居れば「あいつ、ふって居る」と云ふ。

◎七十二……おめこに紙はれ、破れたら又はれ。

△おめこに紙はれ、破れたらもっとはれ……奈良縣(大和国)高市郡眞菅村。

◎七十三……おめこに豆食わせ、歯がない、〳〵、それにまったけ(松茸)ようくうな。

〔註〕女陰のことをマメとも云ふ事は古書にも見え、又地方に依ってはマメと言って居るところも有る。奈良地方はおめこが通常語で、ぼぼは稍下卑て使用される。茹りマメはオメコに縣けたのではなく、蠶豆(そらまめ)のいった物が堅いと云ふ考へ方から発して居るのだろう。松茸は男根にかよわせて居る。

◎七十四……マラ縣オエカミ郡サシコミ村、氣持(よ)四三郎。

〔註〕列車が奈良驛に到着する。驛員なり旅客が歩廊を右往左往し、車内の降客が立ち上り雑然たる時に驛員がナラー、ナラー、十分間停車、ナラー、ナラー、と列車に沿うて言ひ流し歩く時に、ひょっとマラー、マラー、と聞えないでもない。一寸妙に嫌な氣持がする。此の唄も事によるとそうた、し動機と同じ様な事に発して居るのではないか。オエカミ郡は縣内に添(そえ)上郡が有るからもぢったので後は附髄的に加へたまゝだろう。男根の勃起する事をおえると云ひ、他動的におやすと云ふ。業をおえる、業をおやすと他地方の人が言ふと、奈良では少し妙に聞える。此の唄は大人の作で子供が聞き傳えたに違ひない。

◎七十五……戸開縣フミ板郡マタギ村キバリ。

◎七十六……今の屁は誰(だれ)こいた、いい(或はゆい)出しべーから三番目。



◎△七十七……今の屁は、だれこいた、いぬ〳〵すまの、かいるがこいた、こいた方え、ずーっといけよ。

〔註〕右の二の唄は子供の集り中で誰かが屁をひると其の中の一人が主になって「屁をひった本人を言ひ當てる時にうたふ。七十六番は音のせぬ屁をひって臭くなると或る一人が「誰か屁をこいたな、臭い〳〵」と言ふ。其の言ふ者が言い出しべー(兵衛?・夫が屁にかゝりべーと言ふのでないか)で其の者から数えて三人目が屁をひった本人とせられる。右へ三人目か、左へ三人目か、数えて三人目かは定って居ない。七十七番のは唄の字数に合せて順次子供を数えてゆき最終の文字に當った者が屁をひった本人とせられる。屁をひることを「屁をこく」「屁たれる」と云ふ。子供はよくたわむれに兵隊さんのことを「屁たれさん」と云ふこともある。すま(隅)は隅のこと。かえる(蛙)のことをかいると言ふ。いぬ〳〵。隅はいぬいの隅が本来の文句ではなかろうか、考ふべきことだと思ふ。

△いーまの、べーだーれがこいた、いぬ〳〵すまんだ(隅)、かーへるが、ぷーっとこいて、にげとーほるわ……奈良縣(大和国)北葛城郡五位堂村。

〔註〕蛙び仲間の誰かが屁をこくと、一字宛その場にゐる子供を指し数えてゆき最後のワにあたった子供が屁をこいた事になる。

◎七十八……鳴った屁はなんだ、時の太鼓、臭いはなんだ、こうのけむり。

〔註〕此の唄は和の聞きなれぬものだ。

◎七十九……おなら、こなら、ぷん〳〵と、ひゞきわたるは、けつのあな。

〔註〕けつ。とは臀のこと。

◎後出……子供の喧嘩に親出すな、親がひっくりかへって、ぼぼ出すな。

◎後出……喧嘩するならはだかでこい、きんたまぶらつきや、握ってこい。

◎後出…松ちゃん祭においでんか、赤いふんどし、こうたるわ、ちんちん、ぶら〳〵、みっともない。
◎後出…よっちゃん、四つで嫁もろて、赤まらおやして、でーんこ、でーんこ。
◎後出…小林 こんばん 何 ごちそ、おかんのおめこの汁 ごちそ。
◎後出…△△君、何するクン、おやま(おかちゃんとも云ふ)にだかれて、乳のむクン、あいさに、まったけ、つっこむクン。
◎後出…前は巡航船で、ぢり(或はけつ)らっぱ。
◎後出…兵隊さん、ラッパとチンポとかえてんか。
◎後出…兵隊さん、ラッパとオメコとかえてんか。
◎後出…じゅんこまらむけ、いおんでかすとれ。
◎後出…トケヤ㋮ノポンチ、チンポノヤケト。
◎後出…タケムラマサケ、ケサマラムケタ。
◎後出…コメヲタベナシ、シナベタオメコ。

## 返答に関するもの。

◎八十…灰喰って死ぬより、藥飲んで養生せ。
〔註〕返事にハイと言ふ者が有れば、こう言ってからかふ。然し家庭に於ける返事ならいざ知らず子供達の間に於ては、先づハイと言ふものがない。灰を食って死ぬと云ふ傳承はない。子供等は口から出まかせに言ふので有る。養生と云ふ詞は一般に病氣の時なり、病後に主として使用され平常には餘り使はれない。



◎八十一…うんだらつぶせ。
◎八十二…うんときばれば、ばゞがでる。
〔註〕子供間の返事にはうんとかうーんとよく言ふ。其の時にからかう唄で、八十一のうんだらは うむ時にはの意で膣物のはれ上りきった事をうむと云ふ。八十二のきばるはカを入れるの意で有る。
◎八十三…だまーり、だんごのくらい(食)ぬけ。
〔註〕ハイ、ウンいづれの返事をしても文句を言ふので默るこう云ふ。くらいぬけは俚諺に有る無藝大食の意で、物を食べても働かないか、働いてものろいと云ふ樣なことで有る。
◎八十四…知らんなら、しらみの皮とお(千)むいて、くらえ。
◎八十五…知らん、しらみ、とんだらのみや、はぜたらじゃくろ。
◎八十六…知らん 死んでこい、寺の坊主が喜こんだ。
〔註〕ハイ、ウンと返事しても、又默ってもからかうから、モー知らんと云った時に云ふ。又譯のわからぬ事を聞くか又單にもの尋ねて知らんと云ふとどれかの唄を云ってやじる。
◎八十七…なんてなたまめ、こちや こまめ(小豆)。
◎八十八…なんてなたまめ、こしょう こうらい。
〔註〕なんでは何と言ふのですかとの意味の有る疑問詞。なんてと問ひ返えすと斯う唄ふ。こしょう、こうらいの意は不詳。
△うんだらつぶせ、針なきやがしたるわ→ウンと返事すると、……奈良縣北葛城郡五位堂村。
△えー(鱈)より蛸うまい→エーと返事すると……同所。

▲ハイは、はたけのもらい↓ハイと返事すると……同所。
〔註〕ハイは灰だと推定するのだが全体の意味を解し難い。百姓の人達は町に出て灰を買ひ集め田畑の肥料として使用する事が有る。其の事をう左って居るのでないかと思はれる。
▲ナニはなんばのしょんべんかい↓ナニと返事すると……同所。
〔註〕なんばは難波だろう。然し何處の難波を指して居るのか不明。しょんべんは小便の意。
▲だまってだんごの、くらひさし↓默って返事をせぬ時……同所。
〔註〕くらひさしは、又はたべさしはかぶりさしとも言ひ、猫舌引き續き食ふため一時置いたる食物で、時には食ひ残しの物にも云ふ。
▲しらんや、しらめ、はでたら、ぢやくろ、とんだら、のみや↓聟ねて知らんと云へば……同所。
〔註〕はでたらはぜたら、ぢやくろは柘榴の意。
▲えより、たこより、うまい……奈良縣高市郡眞菅村。
〔註〕何かを比べる時の唄だとの事だが、少し疑はしい。五位堂村の唄を參照せよ。
◎八十九……まねーし、まんざい(萬歳)一日あるいて米三合。
◎九十……まねーし、まんざい、一日あるいて米一つぼ。
◎九十一……まねーし、ごんぼ、一日あるいて米一つぼ。
〔註〕二人の子供の口眞似をするとまねられた子供がまねた子供に云ふ時の唄。一つぼは一つぶの事。
▲眞似師五歳、米半分……伊勢のもの。
▲眞似師五歳、屁ポッポ、一日歩いても米一つぶ……同。



◎九十二……何處(どこ)て、堂島、へのこじま。
〔註〕「何處とか「何處に」と問ふ者が有れば、こう云ふ唄を言ふ。堂島なり江子島は大阪に在る。へのこじまは此の江子島から轉じたもので有る。へのことは男根を意味する地方が少くない様だが奈良地方では男根の事をへのことは全く言はない。
▲どこは、どんじり、へその下……伊勢のもの。
〔註〕何處え行くのかと尋ねられた時に答へるとの事で有る。
◎九三……おまはん言うとをり、山で鳥が鳴くとをり、三條通は人どをり、けつの穴は糞(くそ)どをり。
〔註〕おまはんはお前さん、わしやは私はの意で此の言葉は普通に聞かないことはないが普遍的で有るとは言ひ難い。三條通は奈良駅から春日神社へ向ふ東西に延びた大通で、西は郊外の尼ヶ辻、横領に至る。此の通は奈良市の殆ど中央部に位し町を劃然と南北に分って居る。

## 尻とり(回謡)に関するもの。

◎九四……ダイヤモンドたかい、たかいは通天閣、通天閣はこわい、こわいはゆうれい(幽靈)、ゆうれいは青い、青いは坊主、坊主はすべる、すべるは氷、氷は溶ける、溶けるは雪、雪は白い、白いは兎、兎は走る、走るはべっとー、べっとーはえらい、えらいは学者、学者はできる、できるはでんぼ、でんぼはうつる、うつるは鏡、鏡はわれる、我等は日本男児なり。
〔註〕昭和六年九月、奈良の南部の小学生の言って通学して居るのを採集した。こわいは恐ろしいの意。幽靈を最も普通にはゆうれんと云ふ。べっとーはえらいのえらいはつらいの意。

△一角(かく)、二角、三角、四角、四角い豆腐、豆腐は白い、白いは兎、兎は豆腐、豆腐はかへる、か蛙は青い、青いはバナ、ばななはむける、むけるはチンポ、チンポは長い、長いは煙突、煙突は黒い、黒いは黒んぼ。……奈良縣高市郡眞菅村。

〔註〕尻とり唄として不出来で有る。

◎九五……にっぽんの、乃木さんが、がいせんす、すずめ、めじろ、ろしや、やばんこく、くわ(桑)ばたけ、けん〳〵ぱたぱた、たぬき、きつね、ねこ、こんにやく、くわい、いたち、ちんば、ばけつ、つるべ、べんきょを、おしろい、いのしし、しまい。

◎九六……高しゃっぽん、ぽんやーり、陸軍の、乃木さんが、がいせんす、すずめ、めじろ、ろしや、やまのふん、ふんどーし、しめた、高しゃっぽん。

〔註〕ぽん。やり。なる言葉はない、しゃっぽんのぽんを受けるためにぽんとしたので普通にぽん。やりと云ふ。ぼんやりとはうかつ者の意。九六番は尻とりで然も回謡の体裁を具へて居る。

△乃木さんが、凱旋す、雀、めじろ、ロシヤのクロバトキン、きん玉、まき豆腐、ふんどし、しめた、高しゃっぽん、ぼんやり、李鴻章の鼻べちや、ちゃん〳〵坊主の腰ぬけ(或は首とれば)、けつぬんの尾だんごにしよ、正直ばば屁たれて、天国万歳大勝利。……奈良縣高市郡眞菅村。

〔註〕まき豆腐とは如何なる物か知らない。奈良ではそうした名稱はない。

◎次の類例に添ふ唄が有るのだ失念したので掲出し得ないのが残念だ。

△正直婆々が屁こいた、た、狸の睾丸八畳敷、き、狐のおんぼ三尺で、で、出て来る兵士は負け負けぢや、じや、じやはたさ、にげどうし、し、支那の大將李鴻章ー、しよ、正直婆々屁こいた。……美濃国のもの。



△タ、狸のきんたる八畳敷、キ、狐のきんたま團子にしよ、しよ〳〵、正直賣買へこなった、タ、……石見国のもの。

△リ、李鴻章の禿頭、マ、満州兵を打取って、テ、帝国万歳大勝利、リ、……石見国のもの。

## 喧嘩に関するもの。

◎九七……子供の喧嘩に親かもな。

◎九八……子供の喧嘩に親でるな。

◎九九……子供の喧嘩に親出すな、親がひっくりかへって、ぼゞ出すな。

◎一〇〇……子供の喧嘩に親が出る、さあ人だかり。

〔註〕九七のかもなはかまふなの縮語。

△子供の喧嘩に親が出る、町内聞えて恥かいた……伊勢のもの。

△子供の喧嘩に親出すな、親がすべってボボ出すな。……奈良縣北葛城郡五位堂村。

△子供の喧嘩に親つくな……奈良縣高市郡眞菅村五井。

△子供の喧嘩に親かまいな、親の喧嘩に子かまいな……奈良縣高市郡眞菅村豈我。

◎一〇一……喧嘩するなら、はだかでこい、きんたま、ぶらつきや、握ってこい。

〔註〕喧嘩するなら、はだかでこい、きんたま、ぶらつきや、握ってこい。

云ふのは手に何物も持たずにと云ふ意味が含まれて居りそうだ。即ち力づくで来いと云ふ事になる。虔が裸だから睾丸と次の句が必然的に出て来る様になったのでは有るまいか。流石女はつかみ合ふ様な喧嘩をせぬものになって居るのも妙味の有る所だ。

△けんかならこい、はだかでこい、ちんぽじゃまたなら、紙はってこい……奈良縣北葛城郡五位堂村。
△けんかならこい、はだかでこい、きんだまぶらつきや、にぎってこい……奈良縣北葛城郡瓦口村。
△けんかくりやこい、はだかでこい、きん玉ぶらつきや、握って来い……奈良縣高市郡眞菅村。

●一〇二……あっちやまーけて、そーれんや、こっちやかって、肩ぬいだ。
〔註〕そーれん。とは葬式のこと。肩ぬぐとは夏季暑氣の甚だしい屋外から屋内に入った時着物を肩だけぬいで汗を入れ又涼をとる時の所作だが、是は安心した心持ちを表現して居る。
△あっちまけて葬式や、こっち勝って大勝利……奈良縣高市郡眞菅村。

●一〇三……負けて、くやしいか、花一匁目。
〔註〕喧嘩した後勝った者が負けた者にのの、しりかける唄。くやしいは口惜しい即ち残念ぢやないかい、の意で言葉の裡にしっかりして出直してこい何時でも相手になってやるぞの意味が含められて居る。花一匁目の意味がわからない。

●一〇四……白源氏、赤平家。

●一〇五……しろ、えんぱい、あかあんえん。
〔註〕是は喧嘩の時に言ふのでなくて学校遊戯等の時に紅白二隊に分れた時、白組から一〇四の唄を言って源氏と平氏との爭の如く白組が勝つに定って居るとほのめかせば、紅組も負けずに一〇五の唄をうたって應酬する。源氏には義経の如き子供に尤もなじみの深い武將が居るのに平氏にはそんな人が居ないから子供達は源氏が絶對的に強いと信じきって居る。

悪口に関するもの。



●一〇六……小林、こん晩、なに、ごちそ、おかんの、ためこの、しる、ごちそ。
〔註〕小林なる姓の子供に對する悪口。ごちそは御馳走のことで或る者は是をつめてごっつおと云ふ。おかんは母親の意でおかあさんを下卑て述べた言葉で下層の人に使はれて居る。然し最近は著しく此の言葉の使用者が減った様だ。

●一〇七……△△君、何するクン、おやまに、だかれて、乳のむクン、あいさに、まったけ、つっこむクン。
〔註〕△△の所は誰の姓でも差支へない、相手の子供の姓を入れる。久保君とでもすれば珍妙に聞へるかも知れない。おやまとは娼妓即ち女郎のこと。是は関西特有の言葉だ。語源に就いては諸家の説が有る様だが、いづれも適切ではないと思ふ。おやまにだかれてをおかちゃんにだかれて、と言ふ者も少くはない。此のおかちゃんの意は母親だか多少あまへた言ひ振りと解せられて居る。あいさには時には意。まったけは松茸だか陰茎になぞらへた言葉となって居る。おやまにだかれてはおかちゃんにだかれてよりは不自然だが、あいさに松茸を突込む點になると卑猥ながら穩當だ。然し是がおかちゃんになると餘りに破倫的で有る。此處が悪口唄の辛辣らつさが遺憾なく発揮されて好いのかも知れぬ。

△△ちゃん、く、何、しるの、阿母ちゃんに、だかって、屁をたれた……東京市のもの。

●一〇八……松ちゃん、祭においでんか、赤いふんどし、こーたるわ、ちんちん、ぶらぶら、みっともない。
〔註〕松造とか松太郎とか松のつく名の子供に對しての悪口で有る。こーたるわで打ち止める者もある。此のこーたるわは買ってやるの意。ちんちんは子供の陰茎の意で可愛らしく述べるので有る。地方に仍っては幼児の陰門にもちんちんと呼ぶ所も有る。確か山形地方ではその様に言って居る筈だ。みっともないは見苦しいとか見づらいと云ふ意でみっともないともみっともないとも

云ふ。俗謡に「江戸を出る時や、禪忘れノーヤー、長の道中を不自由なもんだねトコヤーセー、ぶら〳〵と、ほんまかドン〳〵」と言ふのが有るが是と對照すると可笑しい。

◎一〇九…みっちゃん、みたらし、くいなんな、五重の塔で、びっちびち。

〔註〕道男とか三千世とか云ふ子供に對する悪口唄で有る。みたらしは串團子の事で丸形ふり、扁平な円形の小團子を五個、竹の串にさして醤油をつけて焼いた物で一串の値一銭。くいなんなは食べなさるなの意。五重の塔は興福寺の塔あたりでと云ふ意味だが、何故五重の塔と云ったのかわからない。下痢便をびっちぐそと云ふ。びっちびちは其のびっちぐその出る形容で此の詰は一の擬聲詰で有る。

▲道ちゃん、道々糞たれた、紙がないとて手で拭いた…東京市のもの。

▲みっちゃん、道々糞こいて、お母ん、一寸来て、ふいてんけ、おかん、ついでに、つかもーか…奈良縣高市郡眞菅村。

〔註〕ふいてんけのけは下さいの意。話してんけとは話をして下さいの意。奈良では殆ど使はないが、郡部では盛に使用される。

◎一壹〇…太郎たっと、とって、たりき、たんまりき、たんべえさんの、子にしょ。

〔註〕太郎の悪口唄だが何のことか、さっぱりわからない。

◎一壹一…よっちゃん、四っで嫁もろて、赤まら、おやして、でーんこ、でーんこ。

〔註〕芳雄とか義太郎とかの名の子供に對しての悪口唄で有る。よっちゃんと云ふかわりによしーと言ふ場合も少くはない。私の子供の時には是を盛に言ったり聞いたりしたが、最近に得た材料では次記の様になって居て逕猥でないのと對句になって居て一層妙味が有る。でーんこ〳〵は形容



詰だか、是は馬が陽物で腹鼓を打って居る時の感から取り入れた創造詰ではなかろうか。

◎一壹二…よっちゃん四つで嫁もろて、五つになったら、嫁かえす。

▲義ちゃん夜中に嫁娶って、よめかと思ったら、猫だった…東京市のもの。

◎一壹三…せいちゃん、せんちで、ババこいて、紙が無いので、手でふいた。

〔註〕せんちは雪隱即ち便所の事。又稀にせっちんと言ふ者も有る。いろはたとえでも「せんちで、まんじゅ、くそても甘い」と云ふ。ババは大便即ち糞の事で上のバを強く言ふ。浪花のババは下のバを強く言ふ。

◎一壹四…よっしん、よったか、よんじゅうろ、よりきんの、よんぶくろ、よりかけて、よったか〳〵。

▲よっしゃん、よっつく、よんじゅうろーの、よりぶくろ、よった〳〵……奈良縣高市郡眞菅村。

〔註〕名前の頭字を使ってかく悪口を云ふ。他も同様だが二三の例を掲げる。ふを使ふと滑稽になる。

◎一壹五…ふっちゃん、ふったか、ふんじゅうろ、ふりきんの、ふんぶくろ、ふりかけて、ふったか〳〵。

◎一壹六…きっちゃん、きったか、きんじゅうろ、きりきんの、きんぶくろ、きりかけて、きったか〳〵。

◎一壹七…みっちゃん、みったか、みんじゅうろ、みりきんの、みんぶくろ、みりかけて、みったか〳〵。

〔註〕此の唄の意味は無いのだろう、只口から出まかせに誰かが言ったのが廣まり此の様な体裁を備へるに致ったのではなかろうか。

◎一壹八…なら縣、なら市、なら坂町、なんどやの、ならこ、ようなく、ならこ。

〔註〕奈良吉とか楢造とか云ふ子供に對する悪口唄。奈良縣奈良市は勿論、奈良坂町も実在する町名で有る。なんどやは主として小菓子屋のこと。一文菓子と稱する安價な子供向の菓子を賣る小店即ち駄菓子屋で有る。従って果物も賣って居る。子供は間食を母親に求

める時には「なんどくれんか」と云ふ。くれんかと言ってはいけません。お菓子をくださいと言ひなさいとたしなめられる。なんどとは「何か食物を下さい」「なにか下さい」と言ふ言葉から出て居るに違ひない。夫れは「何か適當な物が無いかしらん」と探し求める時に「なんど」具合の好い物がないかなぁ」と一般に言ひ、此の時は決して菓子や果物を指して居るのではない。

◎一壹九…たまー、たんぼえ、はーまって、かえるの、きんだま、にーぎった。

〔註〕名前の頭にたの付く子供えの悪口唄。たんぼは田圃に有る糞尿溜のことで有る。

◎一貳〇…かぬー、かん〳〵、ぼーず、くそぼーず。

〔註〕兼吉と云った子供えの悪口唄で有る。

◎一貳一…とくう、とっくり、とーわって、もうひとつ、破ったら、十一や。

〔註〕徳の字のつく名前の子供に對しての悪口唄で有る。とっくりは徳利のこと。

◎一貳二…とし、とんぼ、はね(羽)ない、とんぼ、ほーきで、叩いて、なんまみだぶつ。

〔註〕俊雄とか敏彦とか云ふ子供えの悪口唄で有る。

◎一貳三…禿山、てっとー道、汽車通る。

▲はげ山、てっと道、汽車通る…奈良縣高市郡眞菅村。

〔註〕頭に禿の有る子供にあびせかける悪口唄。てっとー道は鉄道道で妙ふ詰だが鉄道線路の意で有る。鉄道には山の切り割りがよく有り、粘土質が露出して居る所が少くない。此の唄で子供達の觀察力の應用(?)の鋭敏さには感心せざるを得ない。

◎一貳四…ABCD、たんかいとー、はげの頭の、運動會、つるーっと滑って一等賞。

〔註〕頭に禿の有る子供えの悪口唄。たんかいとーは探海燈のこと。今では探海燈ではと云へば半



しか通じなくなった。飛行機等に對して用ふる點から探照燈だ。此の點から考察すると此の唄は日露戰爭後から唱はれたものと推定出来る。

◎一貳五…はげの頭に、はいとまる、ツルリと滑って、又とまる。

◎一貳六…まん直しの地藏さん、頭にふんだらけ。

〔註〕子供の頭にしらくもが出来て白く見える時に他の子供が言ふ悪口唄。まん直しはえんぎをよくするの意。ふんは糞。だらけは一面で有るとの意。「猫灰だらけ」と云へば猫が暖をとるためにかまくどの中に居った爲め身体全体に灰がついて居る時の事を云ふ。此處の糞は鳥の糞の事でまん直し地藏は東大寺二月堂の後方山中に在る地藏尊の事で、堂宇なく雨ぶたしだから鳥の糞尿が白く附着して居る事が稀でない。恰度白くもの出来た頭は夫の樣だと言ふ事になる。私の子供の時に白くもが出来たのでよく此の悪口をつかれていやな思ひをした事が思ひ出される。

◎一貳七…だいもん、てらうち、小屋たて、一銭五厘で、よーはやる。

〔註〕比較的に頭の大きい少子供に福助即ちだいもんじゃのじゃを省略してだいもんと綽名をつける。てらうちは寺内で寺の境内の意で、此處の寺は興福寺を指して居る。其の昔の興福寺境域は奈良公園中の主要部分を占めて居るので、此のてらうちなる詰は公園の意味を持つ奈良獨特の方言で有る。此の詰も私の子供の時代より使はれる度合が非常に少くなった樣だ。今に廢滅するではなかろうか。小屋は見世物小屋の意味を含んで居る。公園に見世物小屋のたつのは先づ十二月十七日の春日若宮の祭礼即ち俗に言ふおん祭の時に興福寺の寺務所東方の芝生に四五の小屋が建てられるぐらいで其の他には先づ小屋の建てられることがない。一銭五厘は木戸銭の意。よーはよくである。從ってだいもんは見世物になる樣な畸形児だとの嘲弄嘆

なので有る。

◎一貳八……△△小さい時、三味線なろて、今はよーひく、ちんば引く。

〔註〕びっこ即ちちんばの氣毒な子供にあびせかける悪口唄で有る。

◎一貳九……兵隊さん、ラッパと、ちんぽと、かえてんか。

◎一參〇……へーたいさん(或はへいたいさん)ラッパと、おめこと、かえてんか。

▲兵隊さん、らっぱと、おめこと、かへてんか……奈良縣北葛城郡五位堂村。

〔註〕此の唄は兵隊が喇叭の音勇ましく隊伍を整えて通る時又は單に兵士が通行する時にも二三人の子供が聲をそろへてうたひ、悪口唄と云ふほどではないが大人から考える一の侮辱的なものと思はれるから茲に掲げることにした。

◎一參一……じゅんこ、まらむけ、いおんで、かすとれ。

〔註〕巡査の背後から悪戯小僧があびせかける悪口唄だが最近では滅多に聞かぬ樣になった。じゅんこは巡公(じゅんこう)から出て居る。巡公は熊吉等を熊公と言ふが如く巡査のことである。いおんはいおう(硫黄)から轉じた言葉だが、実際は焚き付けの一種で薄き細長いへぎの先端に硫黄を附着せしめた附木の事を云ふ。私の子供時代に母がよく使用して居られるのを見たが今は一般に餘り使はないらしい。

◎一參二……ぼんさん、頭に、金柑のせて、のるかのらんか、乗せて見よ。

〔註〕ぼんさんは坊主の事で尊稱的で有る。此の時の発音はぼを強く言ふ。平等発音の時は金持とか上流家庭の男児の尊稱となる。坊主の時の発音で丁稚即ち現今の小店員を丁寧に呼ぶ時にも使用される。近頃の子供は大低理髪店で散髪するので殆どサカイキ(月代)をするものがない。又



子供の散髪代を節約するため家庭にバリカンを備へて置いて誰かが散髪をしてやる。從来の樣に剃刀で丸剃をした子供を見ると、頭をふでさすりながら「おい、ぼんさん」とたわむれに呼びかけたり、「好いぼんさんに成ったね、何處の小僧さんに行くのか」等言ふ。此時のぼんさんは呼び掛けの言葉で頭の修飾的な詞ではない。

◎一參三……ぼーず、ぼーかい、ほらのかい、一日ふいても、米三合。

〔註〕ぼーかいのかいは貝でなかろうか、夫にしても其の意は不明で有る。ほらのかいは法螺の貝。

◎一參四……ぼーず、ぼったりこ、舟に乗って、山え行け。

〔註〕意味不詳、然し坊主への悪口唄で有る事は明白だ。此處のぼったりこの意は不明だが他に「あも(餅の事)搗や、ぼったりこ」と云ふ事が有る。此のぼったりこは餅搗の杵の音を形容した擬音語で有る。

◎一參五……郵便さん、はし(走)らんせ、もーつい十二時。や。

〔註〕郵便配達夫の事を又郵便屋やとも言ふが、茲では唄の都合上かやが省かれて居る。走らんせのせは走りなさいのなさいに相當するが平常は語尾に附けて使用される事は先づないと言ってよい。然し言語学的に考察するには妙味の有る事ではなかろうか。もーついのついは直にとか近くとか軈て、間もなくの意で有る。其の家はつい其處です」「つい御出になりますから、暫く……」と云ふ風に使用されて居る。「つい忘れて終った」の時はうっかりとか不注意にもの意義となる。郵便配達夫が通ると其辺に遊んで居る誰かが此の唄をうたふと皆の者が和して配達夫の背後から浴せかける。是は悪口と言ふ程でもないが、時に集配人を怒らせる事も有る。近頃は余り聞かない樣だ。

▲ユービンや、走らんせ、もうつい、かれこれ、十二時や。……奈良縣北葛城郡五位堂村。

◎一参六…お多福、みふく、風が吹いたらよふく。
〔註〕お多福はおかめの事。此の唄は婦人えの悪罵になる。お多福とは斯うした場合には不美人の代名詞として使用されて居る。又たーやんと云ふ事も有る。
△お多福、みふく、風が吹いたら、四ふく……伊勢の国のもの。
◎一参七…前は巡航船で、尻(或はけつ)らっぱ。
〔註〕通行する婦人を見かけて言ふ悪口唄で有ったが今では全く聞かないと言ってもよい。現時大阪で小型な発動機船は各川筋筋で荷船の曳船用に影使用されて居て、乗客用として市内の川筋毎に見受けることが殆どないまでに衰微したようだが、私の子供時代大阪に連れてもらふと川岸なり、橋上に立って巡航船のポッくと音をたて、動いて居るのを見ると乗せてほしかったものだ。又時には乗せて貰った。當時乗合自動車即ちバス等の有ろう筈はない。更に市街電車はどうで有ったか覚えはないが、たとへ有ったにしても著しいものでなくて、人力車がすばらしく活動をして居た事だった。其處で水上にて巡航船の活躍したのも無理のない事で有り、来明尖端的な交通機関で有ったのだ。いきだとせられたバッテラより遙に進歩的な物だとの考が民衆の脳裡にくひ入った。從って女陰をバッテラと言って形容代用して居たのが巡航船に一變した。尻らっぱは屁の事を言って居るので、よく屁をこく女の意になる。此の唄は大供が大阪から聞き傳へたものに違ひない。廂髪が二百三高地巻など言って、ハイカラだとした時代で有ったので、美しい女をハイカラとも代稱した。若者がハイカラ女を見るとこう言って野次るのを敏感な悪たれ小僧どもの間にもひろまったもので有る。
◎一参八…あの嫁さん、よいけれど、帯の結びよが、どーらくや、内え帰って、むこさんに、叱られて、軍司



のあわいで、泣きわらひ。
〔註〕道を通る比較的年の若い人妻の後姿を見て言ふ悪口唄。どーらくは道楽の意ではなくて、ふしだらとかだらしないとか丁寧でないの意味を含んで居る。あわいは間とか隙間とかの意。
△あの嫁さんどうや、三月櫻の咲く時分、褌一つで、飛んで来た……伊勢国のもの。
〔註〕本唄とは型が少し異って居るが参考にあげた。嫁入時のお嫁さんを見た時にうたふのだそうな。
△あのよめさん、えーけれど、帯の結びよが、どーらくな、いんでととさんに、叱られて、軍司のあわひで、きゃーくと、泣いてるわ……奈良縣北葛城郡五位堂村。
△あの嫁さん、どこ参り、いしかけまいり、石でボボうって、さねとんだ……奈良縣北葛城郡瓦口村。
〔註〕右の三の唄は他村の女房を見た時にうたふのだとの事で有る。
◎一参九…さあきえ、行くもの、さか(酒)屋のでっち、あとから、行くもん、狼けつね。
〔註〕酒はさけと言ふが酒屋、酒樽、酒塩などさかや、さかたる、さかしお等云ふ。行くもんのもんは者、物の意。丁稚小僧に云ふ悪口唄で有るが、次の註の様な時にもうたはれる。
△さっきへゆくもん、酒屋の丁稚、あとから行くもん、狼けつね……奈良縣北葛城郡五位堂村。
〔註〕子供が澤山連れ立って行く時にうたふとのことで有る。
◎一四〇…男と女とチンチンや。
◎一四一…男と女と、仲チンチン。
◎一四二…男と女と、チンチンボコボコ、えっさっさ。
〔註〕男の子供と女の子供のと遊んで居るのを見てへんねし即ち羨ム嫉んだ子供が云ふ唄で有る。チンポ。ポコポ。コはチンポ、ポポを含め込んだのではないかと思はれる。餘に獨斷すぎた如く思はれる

かも知れないが次記の伊勢の童謡を見る時に強ちうがち過ぎた考へだとも云へなかろう。

△男と女と、あすばんもんぢや、きんたんまんたん、傷がつく……伊勢国のもの。

〔註〕きんたんまんたんは一つおきにんが入って居るから試に是を省くときはきたまたとなるが、此の最後のたんは口調の上から附隨したものと考へて省いて見るときたまにふる。夢是はきんたまなる言葉を隱すために斯う云ったのではないかと思ふ。

△男とおなご(女)と、え―こと、ことこと、こんぺんとう……奈良縣北葛城郡五位堂村。

〔註〕男の児が女の児と遊ぶと云ふとの事。こんぺんとうは金粉糖で有る。

◎一四三……女の中に男が一人。

◎一四四……おとこの、なかに、おんなが、ひとり。

△女の中に男が一人……奈良縣高市郡眞菅村曽我。

◎一四五……いとちゃん、糸でくゝられて、ぼんちゃん、ぼてこえ、入れられた。

◎一四六……いとちゃん、糸でくゝられて、ぼんちゃん、ぼてこえ、入れられて、だんなはん、だんから、ころんで、おくさん、奥で、ないてゐる。

〔註〕いとちゃんは單にいとと云ふ。お嬢さんの事で有る。ぼんちゃんは坊ちゃんの事。ないてゐるはないていらるのいを省いた言ひ方で、泣いていられるより稍下卑で居る。良家の子女をからかふ悪口唄。

△イトさん、綿で、くくられて、ボンさん、ぼてこへ入れられて、きゃーくゝと、泣いてるわ……奈良縣北葛城郡五位堂村。

△いとちゃん、糸で、くくられて、ぼっちゃん、ぼてこに、入れられて、旦那はん、椽から轉んで、奥さん



奥で屁こいた……奈良縣高市郡眞菅村。

◎一四七……こぼん、こんにゃく、しじめのおかず。

△こぼんこんにゃく、しじめのおかず、言ふて悪るけりや、こぼんになんな……奈良縣高市郡眞菅村。

〔註〕こぼんとは良家の二男或は三男坊のことを云ふ。おかずはおさいのこと。にしめは煮つけたおさいの事。眞菅村の唄に見ゆるしじめはしじみ(蜆)の事だが、是は奈良の唄が正當で、にしめが轉化して意味が不明に落ち入った。にしめには必らず蒟弱が使用される點に照しても明かだ。

◎一四八……つざか(鼓坂)つんぼ、まめやま(大豆山)豆くて、へー(屁)こいた、あすか(飛鳥)あーすか。

〔註〕此の唄は私の子供時代殊に小学校當時に児童間に言はれたもので有る。是は一つの唄ではなくて途切れて居る。私の少年時代には奈良市に尋常小学校が六つ有り高等小学校が確か一つで有ったのだろうと覚えて居る。其の尋常小学校は奈良の東南部に飛鳥校(今の第二小学校)、東北部に鼓坂校(今の第三小学校)、南部に濟美(せいび)校(今の第四小学校)に相当するものだが取り拂はれ第四小学校は奈良市の西南部に建てられた)、中央部に椿井(つばい)校(今の第一小学校)北部に大豆山町の校舎を取拂ひ東向北町東側に移り朝日小学校と改稱したが奈良女子高等師範学校の附属幼稚園が茲におかれ、奈良の西北郊外に第五小学校として建てられた)の五校と男子師範学校の附属小学校の一校で有った。私は大豆山尋常小学校に通って居たが他校の児童はよく「大豆山豆くて、へーこいた」と此の唄をあびせかけた。其の相手が鼓坂校の児童で有ったら、早速「つざか、つんぼ」とむくいたものだ。濟美校と椿井校には何と言ったのが私の記憶には残って居ない。

△あすかの附属校は、よい学校、椅子に坐って、しらめ取り、しらめ逃がして、あーすかく……奈

良縣高市郡眞菅村。

〔註〕是は飛鳥の学校の生徒に向って云ふとの事で有る。

◎一四九…ほーれの、ごんた、青ばなたれて、はいかをく。

〔註〕ほーれはほうれん(法蓮)で地名、今では奈良市法蓮町で有るが前は奈良縣添上郡佐保村法蓮で有った。市内の西包永町、北袋町とは佐保川を距て、相對して居た。大多數は農家で有った。ごんたは洟を強く鄕音かせ、悪戯者、強情者或はならず者等の意が有る。青ばなは青い鼻汁の意。はいかをは灰を買ひませうの意。百姓は町家から灰を買ひ集めて田畑の肥料の一として用ひて居る。此の唄は西包永町あたりの子供が法蓮の子供に言ふ悪口唄で有る。

◎一五〇…あほんだら、ぼーだら。

〔註〕あほんだらは阿呆の意。ぼーだらはいたづらの意。棒鱈である。阿呆と棒鱈との間には何等関係はないたづら唄の関係が存するだけで有る。是はいたづらをせられた子供がいたづらをした子供に對して云ふ唄で有る。

◎一五一…しわんぼーの柿の種。

〔註〕何か物をくれと要求して是に應じなかった者に言ふ悪口唄。

◎一五二…こー、はったいのこ、あたま、はったいのこ。

〔註〕こーは粉で有る。はったいのこは小麦をいって粉にした物。此の粉を篩分けする事を俗にはたくと云ふ。夫れで此の粉末をはたいた粉、からはたいの粉、はったいの粉と変化したのではないかと思はれる。此の唄は悪口唄ではなくて他の子供の頭をピシャリとはりつけておきながらうたふもので有る。從って後の句が主で頭をはったと言ふ可きだが、類型文句を引き出して来たから、



頭はったいのこと韻を合せるに致ったものだ。

◎一五三…屋敷を拂ふて、田賣り給い、デン手古舞のみこと。

〔註〕此の唄は天理教なり、天理教信者に對する悪口唄で有って、決して子供の創作に出たものではない。然し古くは子供がよくうたったものだが、最近は殆ど聞かなくなった。田賣り是は天理教の素晴しい発展と幾分天理教に對する理解が一般世人に胚胎して来た事を事實上有力に物語って居ると見てよい。此の「田賣り給い」の次に「柿の木で首吊って」と挿入する者も有る。是は悪罵の極点に達したものと言へよう。此の唄は天理教のすわりづとめの御神樂歌ぢの一に「悪きを拂ふて、助け給へ、天理王の尊」と云ふのが有るが、夫に擬らへて作られたもので有る。天理教即ちお道(信者が言ふ言葉)では貸物借物の理が説かれ人間の持つ総てが神より借り受けた物で有る。神は人間に総ての物を一時貸した物で有る。夫れで何時か或る時機に際しては神に返濟せねばならぬとなって居る。其点でつきつめた考を持つ信者は病氣金快等を轉機として自分の財産の主なる物即ち家屋、田畑等を神に捧げる。而して自分はどん底生活に甘んじ進んで「お助け」と稱して病家に入り「お(借氣もなく)授け」を行ふ。こうして其の病人が全癒した時には「おはたし」をしなさいと言って自分と同じ道程に入る事をすすめる者が少くない。其点で此の民謡の発生となったので有る。

遊戯唄の内、拳に関するもの。

◎一五四…ジャンケンほい、あいこでほい。

〔註〕あいこでほいはいつも云ふものでない。皆の者が鋏なり或は石なりを出した時に云ふ。普通

會話時にはあいこ(同様とか皆揃ひとかの意か)と云ふ語は使用しない。

▲ジャンケン、ホーイ、アイコデ、ホーイ、オイモン、ドッキー……奈良縣北葛城郡五位堂村。

〔註〕オイモンは多い者の意で、ドッキーは去るとかよけるの意。

▲ブリナシ、ホーイ(鋏なしのこと)……奈良縣北葛城郡五位堂村。

〔註〕鋏で物を切る時の形容をブリ〳〵切ると云ふ所からブリを鋏の代用語としたのだろう。

▲パラナシ、ホーイ(風呂敷なしのこと)……奈良縣北葛城郡五位堂村。

◎一五五……ぐうー、ちょき、ぱあー。

◎一五六……ぐうー、ちょき、ほい。

〔註〕風呂敷なしの場合をも意味するが一五五と同様に使はれるのが普通だ。

◎一五七……すくないもん、ええねん。

◎一五八……はさみなしで、ほーいらん(又はふろしき或はいしを隨意用ふ)。

◎一五九……だいにっぽんいーちや。

◎一六〇……南北アメリカ、ヨーロッパ、押上町、かえるふんでグッ、八幡宮、あんどけってチョキ、奈良の櫻が、パッとひらいた、パッとすぼんだ、日清戰爭、手をかくせ、大砲打ってドーン。

〔註〕全体として何等の意味もなさないが、パ或はパッの風呂敷、グッの石、チョキの鋏を言はんが爲めにこんなことを言ふものと解すればよい。

◎一六一……りっしん、ほーいらん、あいこでほい、あいこでほい。

〔註〕此の石拳唄は私の少年時に專ら言ったもので有る。近頃は余り聞かない樣で有る。りっしんほーいらんの意は不明で有る。あいこでほいは一五四の註に述べて置いた。



◎一六二……みやま何處ぇ行く、かづさの山へ、かづさ山から、谷底見れば、ちいさな、こどもが、ごいしを、ひろて、紙に、包んで、こーやえ(粉屋か)なげて、こーやの番頭さんが、金かと、おもて、あけて、見たれば、ごいしで、ござる、あれまかしょう、これまかしょう、きんじゃん、ほい。

〔註〕大層長い唄だが、やはり石拳唄で、最後のほいで、手を出す。一般に子供はごいし(碁石)と言って居るが是はごいし(小石)でなくてはならない。

## 遊戯唄の内、數よみに關するもの。

◎一六三……ちゅー、ちゅー、たぁー、かいの、じゅ。

〔註〕子供殊に女の子がはじき玉遊びをする時、數よみに三個宛之を唱えて玉を取ると拾個得られる。かいのじゅは皆で十の意味で「皆の十」ではなかろうか。

▲ちう〳〵たこかいな……東京市のもの。

▲二、四、六、八ッの十……名古屋市のもの

▲い、ろ、は、に、十……名古屋市のもの　昭和七年九月十一日青海樓の弘子に聞く。

▲ちう、ちう、たあこの、くわいが、十丁……信濃国のもの。

◎一六四……やまぶし(山伏)のほら(法螺)の貝。

〔註〕子供が室内遊戯として將棋のこまを以って「金ふり」なる遊びをする時に、こまを無雜作に列環狀に盤上に並べ何處かを起点と定める。そして此の唄を唱へながらこまを一つ一つ輕く押へながら進み、最後に法螺の貝のいに當ったこまを取り除き、次番の者も同樣にして十番目のこま即ち貝のいに當ったこまを取り去る。斯くして遊び仲間に駒を分配して、此のこまの

分配が終ると「金ふり」に移り初める。何故此の唄が是に使はれるか其の理由は不明で有る。

◎一六五……さゝぼこのおいともち。

〔註〕さゝぼこは奈良の笹鉾町のこと。おいともちは餅屋の屋號。おいともちは旧家で今は餅を專問には商って居ないで煙草店と飯屋をやって居る。此の唄の字数は十で一六四の山伏の唄と同様に金ふり遊びの駒分けの時に唱へる。又女の子供がはじき玉よみに一六三のちゅーくたぁーの代用として此の唄を使ふ事も有ると云ふ。さと言て一個或は二個のはじき玉を取れば拾個或は貳拾個を数へ取り得られる。何時誰が言ひ出したが奈良の北部一帯の子供は是を知って居る。

遊戯唄の内、尻まくりに関するもの。

◎一六六……きょーねんの、尻まくり、はやった。

〔註〕きょーねんは去年の事か明でない。流行ったでは無くて流行ると言ふ可きだが、其處が子供の言葉で無理のない所だ。夏の夕暮、街路で子供が澤山遊んで居ると、其の内の誰がやり出すと云ふ事なく、思ひ付きの儘、此の唄を唱へて他の子供の着物の裾をとって尻まくりにかゝる。大低の男の子供の好みそうな悪戯で、面白がって女の子供を追ひ廻はす。すると子供達は尻まくりをせられまいとして、背部の裾の中央部を両手でしっかりと持ち、前方の腹部あたりまで着物をしめあげ、尻まくりをせられぬ要心をしながら、他の子供の尻をまくり歩く。誰か尻をまくられると、多数の子供は尻まくりせられた子供を取り巻いて騒ぎ立てる。若し夫が女の子供だと結局大聲に泣いてけりがつく。

△お臀の用心小用心、今日は廿八日、明日はお亀の團子の日……東京市のもの。



△今日は二十五日、尻まくり、はやった……奈良縣北葛城郡五位堂村。

△大阪から狀がきて、尻まくり、はやった……奈良縣北葛城郡瓦口村。

△大阪の、尻まくり、はーやった……奈良縣高市郡眞菅村。

△今日は、十五日、尻がいっぱい(一杯)、見たいな……石見国(島根縣のもの)。

〔註〕遊び方を記して居ないが文言からして尻まくりの遊戯唄と思はれる。

遊戯唄の内、鬼遊びめに関するもの。

◎一六七……オニクラするもん、此の指たかれ。

◎一六八……オニゴクするもの、此の指たかれ。

〔註〕オニクラ、オニゴク共に鬼遊びの事で有る。オニゴクはオニゴッコの轉訛で私の子供時代には專らオニクラと言ったものだ。今も此の言葉は残って居ることと思ふ。もんは者又は物の意で有る。たかれは集れの意でたかるは自動的で有る。從って「此の指たかれ」は「此の指の元へ集れ」即ち「寄ってこい」と云ふことで有る。此の唄をうたふ時は右手を高く上げ人さゝ指一本突き立てる。此の唄はオニクラのみに限らず仲間を集める時に云ふのだから、オニクラの代にシンゲキとかカイセン(帽子を横向にして遊ぶ)とか思ひ付いた遊戯名を入れる。

△鬼ごっこ、するもの、寄っといで(又寄って来なな)……東京市のもの。

◎一六九……鬼の留守の間に、洗濯しょか。

〔註〕鬼が他の子供を追って自分の方へ来ない時、つくばって洗濯する眞似をして鬼を呼ぶ。

△鬼の居ない内、洗濯ジャブ ジャブ……東京市のもの。

遊戯唄の内、お手玉に関するもの。

◎一七〇……おいちか、おにん、おにんかおさん、おさんかおよは、おつく、うんにゃほい、おかきかいかけ、どーいこ、おいちのおくくみ、おにんのおくくみ、おさんのおくくみ、

〔註〕お手玉の事を奈良ではてんちゃんと云って居る。此の唄は完全に採集されて居ないから何時ぞか補訂しなければならない。

遊戯唄の内、羽子突に関するもの。

◎一七一……ひとめ、ふため、みやこし、よめご、いつやの、むさし、ななやの、やくし、ここのやで、とまった。

〔註〕ここのやでをここのやねにとも云ふ。然し歌意も統一した事を述べて居るのでもなし、又解し難い事で有るがここのやでとまった(此處の屋で泊った?)がもとで、羽子つきを一般に街路で行ふ結果よく羽子が屋根だとかとゆに止まる所から即興的に歌詞が變更されて「此處の屋根に止った」となったものだろう。

△ひとめ、ふため、みやかし、よめご、いつやの、むさし、ななやの、やさし、こーのや、とを……東京市。

△しとめ、ふため、みやかし、よめご、いつやの、むさし、ななやの、はしろ、こーのやで、とを……近江国長浜。

△ひとめ、ふため、みやこし、よめご、いつやの、むさし、ななやの、やくし、ここの屋根へ、とーまった……奈良縣高市郡眞菅村。

◎一七二……いちごに、にんじん、さんしょに、しいたけ、ごんぼに、むかご(又はむくたけ)、なすびに、やまのいも、くわいに、とうがらし。

△いちじく、にんじん、さんしょに、しひたけ、ごんぼに、むかご、なぐさ、はじかみ、くねんぼで、



とんがらし……近江國長浜町。

◎一七三……一人(ひとり)来た、二人(ふたり)来た、見に来た、呼びに来た、いつの間(ま)にや、飛(と)んで行った。

◎一七四……一人来た、二人来た、見に来た、呼びに来た、いつの間や、おたやんがとんで出た。

〔註〕両唄とも唱へられるが前の唄の方が後の唄よりは多く使はる、様で有る。後の唄は前の唄の變形と見てよい。斯うした變形唄は局部的に唱えられて居る事で有ろう。私の子供時代には直径三分位の飴の丸棒を「飴の中からおたやんがとんで出る、奴(やっこ)さんもとんで出る」と云って町中を賣り歩く者が有った。今は駄菓子屋の店頭に並べて有る事を見受ける事もあるが、賣り歩く者を絶えて見聞しなくなった。「福は内、鬼は外」の考へからか、春日神社の節分祭の當夜露店で賣って居るのを見受ける。夫れは飴棒の断面にお多福の面相が折っても〳〵現はれるもので有る。斯うした賣り聲の文句を取り入れたに違ひない。

△一人来(き)た、二人来た、見てきた、寄って来た、何(いつ)時来ても、むつかし、なんの藥師、こーの前ぢや、ナよ。

△一人来た、二人来た、見て行きた、寄って行(ゆう)きた、何時来て見ても、(六の項は書いてなかった)、七子帶しを、やぐるまにしめて、ここのよで、一丁……二つ共に東京市のもの。

◎一七五……やった、もろた。

〔註〕羽子突唄と云ふ程でもないが、一つの羽子を一人がついて相手に送り、相手は此の羽子を手にとらずに突き返してやる。此の方法を繰り返えして遊ぶ羽子突で、其の時の掛け聲とでも云ふべきもので有る。

遊戯唄の内、手鞠つきに関するもの。

◎一七六…おせぐら、やぐら(櫓)え、乗り着くか、よーし(與四)か、よさぶ(與三)か、またさぶ(又三)か、またさぶ、なんぞの女房は、八つで、紅かね(鉄漿)、つけられて、十をで、熊野え、参られて、熊野の、お寺は、だれ(誰)建てた、八幡長者の、おとむすこ(二番末の男子のこと)、おーとは好い子や、きれな子や、おきりよに、育てた、ことなれば、てー(手)には、二本のやー(矢)もって、足には、くろがね(黒鉄)、くつはいて、むこーふ(彼方)を、とーりやる(通られるの意)、どこ(何處)な、どーしや(道者)や、かーた(肩)にかけたる、かーたびら(帷子)、肩と裾とは、梅の折枝、中は、ごぜんの、そーれはし(反橋)、それはしから、水が出て来て、ごばん、かさねて、なーがし、なーがした、ありや、どんどん、どん、こりや、云ふ字と、白と云ふ字と、玉と云ふ字と、三つかさねて、なーがし(流し)た、いくつ流した、三つ流した、金と云ふ字と、白と云ふ字と、玉と云ふ字と、三つかさねて、どんどん、どん、よう〳〵、一貫、つきまーしたっ、たった、たったの、おばばに子が出来た、負ふても、抱いても、よう泣く子やな、こんど出来たら、踏みこーろせ。(又は踏みつーぶす、すっすっす)

〔註〕私は此の唄を最も興味をもって調べたいと思って居る。いづれ機を以て調べ得た発表もしたいと思って居るから此處では省く。「きれな子や」は「きよな子や」と云ふ方が多いらしい。「そだてた、ことなれば」を「そだてた、おこなれば」の方が多い。「金と云ふ字と白と云ふ字と玉と云ふ字と、三つかさねて」を「金と云ふ字と銀と云ふ字と、三つかさねて」とも云って居るが、後者の方は意味も通じ韻の點からも妙味が有る。然し童ぬ方が今一つ足らぬ様だ。是は「金と云ふ字と、銀と云ふ字と、玉と云ふ字と、三つ童ぬて」と言ふと好いと考えられるし、又元も斯う言ったのではなかろうか、考へて見るべき事だと思ふ。

◎おせんが、櫓へ乗りついて、よすか、よさんか、またさうか、またさう、納戸で上がけや、三つで紅かね、つけられて、十で熊野へあげられて、熊野のお寺は、誰たてた、八万長者の弟息子、弟はよ



い子や器量な子や、足には黒革靴はいて、手には二本の槍もって、そこを通らる何處の道者や、熊野の道者や、肩にかけたる、かたびら、肩とすそとは、もめのおりひざ、かい流せよ、スッテントン……奈良縣山辺郡福住村。

◎お仙が櫓へ乗りついて、よすかよさぬか又三か、又三何での行裂は、八つで紅鉄漿つけられて、十で熊野へ詣られて、熊野のお寺は誰建てた、八幡長者の乙息子、乙はよい子じや器量の子じや。お器量に肩てたお子なれば、足にはくろがね靴はいて、手には二本の槍持ちて、栗毛の駒にまたがりて、何を通りやる、何處の道者衆や、熊野の道者衆や、母の悩みを神に願ひて、肩にかけたる帷子、肩と裾とは梅の折枝、中には御前の袖の橋、袖の橋から水が出て来て、小萬に小袖を流した、いくつ流した、七つ流した、とても流せば、こんといふ字と、水といふ字と、書いて流しやれスッテントン……崎山卯左衛門氏より、奈良縣宇陀郡曽爾村。

◎お仙がやぐらへ乗り付いて、よしか與三郎又三郎、又三なんぞの女房衆は、八つで紅かねつけられて、九つ熊野へ参るとて、熊野の道で日が暮れて、とぼしても、とぼしても、ともらいで、あの子よい子ぢや縹致の子、縹致ましで、去ったお子ぢやもの、足には黒金くつはかし、手には二本の槍持たせ、向ひ通りやる熊野道者の、肩に掛けたる帷子、肩裾は、梅の折枝、桃の折枝、中は五條の反橋、反橋の茶屋のお蘭は、どこで打たれた、こーで打れた、日本橋まできこえた、聞えてはならぬぞよ、一つでは乳も飲みそろ、二つでは乳首はなして泣きそろ、三つでは三重鼻緒のじょじょもはきそろ、四つでは用も聞きそろ、五つでは五色の管も巻きそろ、六つでは機を織りそろ、七つでは七色の管も巻きそろ、八つでは錦も織そろ、九つでは小袖仕立て、十でとんと納めて、十一で花の様なるお子を設けて、十二で春日へ参らして、春日さんの縁の下から雨も降らんに、雪も降ら

んに、水がどんどと流れる、此水を止めて見たなら月に七日のおかんじよ……伊勢国のもの。

△向こひ通るはお熊野道者、肩に掛けたる惟子、片裾は梅の折枝、中には五條の反り橋、其橋を渡るものかや、渡らぬものかや、こっきりこっきり、小女房どこで賣られた、吾妻街道の御茶屋の前で賣られた、茶屋の娘は、にほんてつくりかいて氣をこえた、一つでは乳も呑み初め、二つで乳首はない、三つではものもよう書く、四つで御手本あげそめた、五つでは何もようする、六つで繰り機織り初め、七つでは何もようする、八つで金襴緞子の織り初め、九つで御歯を黒めて、十で殿御に逢ひ初めた、お十一で玉のやうなる男の子を生んで、明日は春日へ參らせた……

福井縣(越前国)勝山町。

△向ひの小寺を誰や建てた、八幡長者の乙娘、みめよし縹致よし姿よし、手には二本の珠を嵌め、足には黄金の履を嵌め、こんの山路はよいけ、はよいけ(早く行きなさい)、せかさんせーなや、(急ぎなさるな)、御馬に乗りたか、乗らさんせ、御馬も銭々、御馬も銭々、チロレン、マロレン……石川縣(加賀国)河北郡七塚村。

△向ひ通られダゴ娘、シホヤカクベの弟娘、雪駄穿かせて、絹着せて、絹ではないもの布やもの、布の下から手を出せば、ヤレくなさけやかけどくない、親に三貫子に五貫、して才バマの四十五貫、四十五貫の金持は高い米買って何にする、船に積むて、買ふわいの、高い小豆買って、何にしる、船に積むて、買ふわいの、船は何船関東船、関東土産に何買って来た、笹の葉のついた惟子一枚買って来た、誰に着しまてて買うて来た、才バアに着しまてて買うて来た、才バアに着しまてて買うて来た、才バアは今日は七日いって見やれよ、墓ついて、墓のめぐりに松植えて、千松ワガヤというてトリヤレー、いうてトリヤレー……富山縣(越中国)中新川郡水橋町。



△向ひの小寺を誰や建てた、八幡長者の弟娘、みめよし縹致よし姿よし、手にはネハン(涅槃)の玉を据ゑて、足には黄金の履穿いて、あゆべくと責められて、馬に乗るかや、馬もいやく、牛に乗るかや、牛もいやく、テンカ女郎衆の御駕籠に乗りたや、乗りたや……富山縣中新川郡水橋町。

△おせんの檜で手鞠をつけば與四か與三か又三なんぞの女房は、六歳で紅鉄漿をつけそめて、十歳で熊野へ參らせて、熊野の御堂は誰が建った、八幡長者の小娘が、獨で建った、二人で建った、三人兄弟ある中に、登ればのほりの緒が切れる、降ればくだりの緒が切れる、建ってお呉れよ社さん、たってやるのは易けれど、この子があるから建てられぬ、やがて雨降り川が出るその時流して建ってやる、ちょと百衡いたも鞠の数、鞠の数……山梨縣(甲斐国)東山梨郡。

△おせんのやぐらへ血が垂れた、血ではあるまい、紅である、おもてへほせば人が見る、裏へほせば犬が見る、鹿のやごへ干したらば、ちうく、鼠がひいてった、吉原田圃皆田圃、橋の下の坊さんは、小間物店でも出しませう、一は、二は、三は、四は、五は、六は、七は、八は、九の十から落ちた芋やさん、お芋は一升いくらです、一銭五厘に負けてやる、隣の叔母さん、お茶召がれ、芋の煮えたの御存じないか、あとのおならは御免だよ……武蔵国のもの。

△ここをとほりやの、熊野道者は肩にかけて、かあさぶさ、かさぶさの、梅の折り枝、中は水晶で反橋、反橋を渡る渡る、茶売茶柄杓、何處へ落した、吾妻街道の茶屋の娘は、天下一の機織り、一つでは乳を呑みそろ、二つぢや乳離れて、三つでは水を汲みそろ、四つぢやよい茶を出しそろ、五つではくだをまきそろ、六つぢやころばりあいたちこ、あいたちこ、七つでは綾を織りそろ、八つぢや錦を織りそろ、九つぢやこ・へもらはれ、十ぢやここへ賣られて、まづく、一貫、御貸し申した……武蔵国のもの。

△向ひ通るは誰が娘、尾張左近の乙娘、とってもいい子ぢや、縹致の子ぢや、あしが女房になるならば、錦はかせて絹着せて、馬に乗るとも、ふは〳〵と、船に乗るともふは〳〵と、こんどござれや、お姉様、来よう〳〵と思へども、船が沈んで死んだなら、茶宛茶柄杓、婆さまに、太刀刀、せな様に、ぴいぴから〳〵は、や〳〵様に、矩燵櫓は爺様に、あとの残りは、みなおきみなおきす……福島縣(岩代国)安達郡杉田村。

△向ひ通るは誰が娘、尾張左近の乙娘、己等が女房になるならば、絹着せて、金襴緞子の帯とせて、(帯させては帯を締めること)、なにの山にも寝たけれど、松葉に刺されて、眼が覚めた、茲は何だと思たれば、鎌倉街道の元屋敷、もとに續いて信濃町、信濃土産に何に買うた、飴か、おこし、か、甘艸か〳〵……福島縣(山石代国)本宮附近。

△あつく通やれここ十やれ、小田原名主の中娘、色白で、櫻色で、江戸崎庄屋へ貰はれた、江戸崎庄屋は伊達の庄屋で、絹紬七重ね八重ね、重ねて染めて下んせ紺屋さん、紺屋なれば染て進上、模様へ何を附けましよ、片袖は梅の折枝、桜の折枝、なかは五條の反橋、反橋を渡るものとて、渡らんものとて、コツケラコンの紺包、誰に打たせて此包、吾妻街道の茶屋の娘に打たせたが、見よくないとて、龍田川原へ身を捨てた、身は沈む、髪は浮きる、ザンブ、コンブと、流れる〳〵、流れるとしれたれば、七里妙浪が打って来た……福島縣(山石代国)本宮附近。

△とうこ通りやる、小田原通りやる、小田原名主の中娘、色白で梅色で、江戸先庄屋に貰はれて、其庄屋は伊達な庄屋で、着るもの何々着せまんしよ、絹やつむぎや、金らんどん子に、蘆紫を、七重へ八重かさねて、染めておくのは紺屋さん、紺屋ながらも染めてもおくに、散しに何々付けまんしよと、肩から裾まで雪をり牡丹に、水にもまるゝ荒浪を、其荒浪どこへ流れる、お辰が袂に流れこむ、其のたもとは廣い袂で、中で戻れば、いや戻る〳〵……山形縣(羽後国)酒田町。

△向う通るは、お伊勢道者か熊野道者か、肩にかけたる帷子、肩と裾とは、梅の折枝、中は薄茶で染め分けの〳〵、ちょっきり、こっきり、小女房は、何處で打たれた、東海道でうたせた、一ツでは乳をのみ初め、二ツでは乳口にはなれて、三ツでは水を吸ひ初め、四ツでは用をきき初め、五ツでは絲を捻り初め、六ツではむか機織り初め、七ツでは綾や錦を織り初め、九ツでは此處の紺屋へ嫁入りし初めて、十ヨでは殿御に添ひ初めて、十一では玉の様なる子供持ち初め、世話をするのが十ツとんとん……岡山縣(美作国)津山町。

△向うの小寺は誰が建った、八幡長者の乙娘、ひはよい子ぢや、清で育てた子ぢやものに、木綿着せまい紬きせて、紬がいやなら、せっきには、せん〳〵雪駄を買うてやろ、せん〳〵雪駄が可嫌なれば、金打ち雪駄がいやなれば、昨夜つむいだ綿帽子、お馬の上から打かけて、後の婆がよいけれど、前の小袖に血がついて、血では左い〳〵、夕々化粧けはひの紅だった、そりやすかとん、そりやすかとん……岡山縣(美作国)津山町。

△向う通るは、お寺でないか、お千でないか、行きて見て来い、おせんでござる、お千こりや〳〵、何故髪とかぬ、何が嬉しかて髪ときましよに、一人父さん、冥土に行きやる、一人母さん、大阪に行きやる、可愛兄さん、出雲に行きやる、出雲土産に、何々貰ろた、櫛に笄八寸鏡、紬七尺是れ貰ろた、もろは貰うたが、帯にや短し、襷にや長し、紵けて、しそめて、山田にあげて、山田藥師の鐘の緒に……鳥取縣(因幡国)鳥取市。

△向う通るは誰が娘、問屋八兵衛の少娘、音に聞えた器用な子ぢや、器用に育てた子ぢや程に、親に千貫子に五貫、締めてお駕籠に四十五貫、四十五貫のお金は何うした、安い米買てお船に積んだ、

船は何船都船、都戻りに何貰うた、金襴緞子の帯貰ろた、帯をもろたがまだ紵けぬ、紵けて下さいおばこさん、紵けて遺りたいものぢやもの、帯にや短し襷にや長し、いまで約せぬかねの綱、かねの綱……鳥取縣(因幡國)鳥取市。

△何への小寺は誰が建てた、八幡長者の乙娘、アラくようこそ建てられた、棟には法華經誦み揃へ、足は黒金鑾金、人の通らぬ山道を、通れくと責められて、否かならずに通ったら、元の殿子に行逢うて、御暇下され左門様、御暇やるのは易けれど、己等の女房になるならば、白足袋、紺足袋、木綿足袋、……熊本縣(肥後國)熊本市。

△何ふを通るは生徒ぢやないか、六つの年から学校通ひ、砂を焼く夏、雪降る冬も、雨の降る日も風吹く日にも、つひぞ一日遅参もせずに、精を出したる利発の娘、何日の試験も皆よく出来て、今は生徒の第一番よ、夫れと云ふのも常平生から、人の云ふ事よく聞き分けて、寝ても起きても、我儘云はず、父と母との教へを守り、外の教師の論しを受けて、習ひ覚えし修身行儀、親の名も出る世間でほめる、ほんの孝行娘ぞよ、あやかるなくく……山口縣(周防國)山口市。

〔註〕此の唄は小学校の先生が改作して生徒に教へたものだろうと思はれる。

◎一七七……ゆんべ出来た、吉ちゃんは、はま下駄はいて、傘さして、きんく橋を渡ろうとて、鰐に横腹はさまれて、あいたい、こいたい、ごんべさん、これを助けて、おくれたら、あの山ひらいて、倉たてゝ、倉のこぐちに、松植えて、松の小枝に鈴つけて、鈴がなったら、起きやんせ、鈴がならねば寝てやんせ、よう〳〵一貫つきまーしたった。

〔註〕きん〳〵橋を天神橋と云ふ事も有る。はま下駄とは高下駄のこと。こぐちは入口の意。起きやんせは起きなさいの意味だが此の唄以外日常にしなさいの事をしやんせなど言はない。



△ゆまふべでーきた、あかちゃんが、はま下駄はいて、傘さして、一本橋を渡るとて、下からかーに(鰐)にはさまれて、上から、つうる(鶴)に、つづかれて、あいたい、こいたい、げんべーさん……

奈良縣高市郡真菅村。

◎一七八……つくつくぼうしのかんてらは、だーれ(誰)にみしょとて、かね(鉄漿)つけた、おちご(お稚児)にみしよ(見せよう)とて、かねつけた、おちごは、きよーを(京)へのーぼって、おちごのみやげに、何もろた、あーかい(赤い)きれ(布片)を三尺と、白いきーれを、三尺と、六尺もろたら、やれうれしや、やれうれしし。

〔註〕つくつくぼうしは蟬の一種にも呼びなして居るが、茲の物は土筆の事で有る。然し唄でなく日用語としては土筆をつくしと云ひつくづくしとは言はない。方言存在としては事らつくつくと言ふ。此のつくつくなる語は土筆が土中より露出する時の形容を名詞として用ひ来ったのではないかと思はれる。つくつくぼうしは唄語として変形的形式に出たか、或は古き方言の遺存かのいづれかで有ろう。研究を要するものと思ふ。かんてらは燈器の一種を指示する語だが茲のものは如何なる意味で有るか明かでない。

此の唄は手鞠つきの唄だが初春野辺に花摘み、土筆とりに出る子供達がよくうたふ事が有る。赤いきーれと云ふ代りに赤いおべべと云ふ者も有る。べべは普通奈良の方言としては衣服を意味して居るから、三尺及び六尺の語義を生かせるためには、赤いきーれの方が正基で、赤いべべの方が其変形と見るのが至當で有る。

◎一七九……もんどや、ちょうどや、はかりにかけて、さあーいちもーんめ(一匁)、あしこやし、どーんどをーんや

〔註〕もんどや、ちょうどは其の意味が判らない。

◎一八〇……さーあのをのお猿さんは、赤いおべべを、だいおーおすき、テテ、チャンノ〳〵。

〔註〕さーあのをは山王の轉訛だろう。大和志料下巻四九六頁の檜隈坂合陵の項に次の記載あり。

欽明帝ノ陵ヶ丘坂合村大字上平田ニアリ、元禄中陵辺ノ田ヨリ畸形ノ石偶四軀ヲ掘出シ之

其の一、
一石に
三面

其の二
一石に
四面

其の三
一石に
三面

其の四
一石に
二面

ヲ陵上ニ立ツ、其形猿ニ似タルヲ以テ猿石ト呼ビ終ニ山陵ヲ猿山又山王山ト字スルニ至ル。

べべは或地方では女陰の事で有るが、奈良では着物の事で有る。おべべとは丁寧に述べて居る。だいおーおすきは大お好きで有る。従って此の唄の意味は山王さんのお猿は赤い着物が大変好きだと言ふ事で有る。「猿と赤い着物」是は大に考ふ可き事だと思ふ。

▲さんのをのお猿さん、赤いたべを、じょぶにつけて、ててしゃん〳〵、ゆうべ七日によばれて来たのは、鯛のやきもの、いがいの吸物、一杯おすすりなァさーれ、三杯目には、ななしのごんべさんが、さかながないとて、お腹を立てて、はってな、はってな、はって〳〵、はってな、ちょど一貫つきました……奈良縣北葛城郡五位堂村。

◎一八一……ひーふーみーよろいの人形は、顔あかえ、あかえのすいもん、たこの足、お足なんばのなんぜん寺、なんぜん寺の、和尚さんぼんさんで。

〔註〕此の唄は完全でない、以下不詳だから書き入れられない。此の唄は元来は大阪のものらしい。次の類型唄として大阪のものを参照すればよい。

▲一イ二ウ三イ四ウ鎧の人形は顔赤い、赤鱒の吸ひもん蛸の足、おあし難波の南ぜん寺、なんでそないにおしゃんす、おしゃんす長持挟ん箱、重箱、お供に奉る、たいまつ、しゃうしん、賑やかな、にんにやかだらすけ、癇によし、よしのお山は皆天狗、てんぐちらく、ちっとらや、虎屋の羊羹豆杓子、しゃくし如来の釋迦のてん、しゃかの天から窓覗く、桃栗三年、柿八年、柚が九年でなりかゝる、梅はすゐとて十三年、のみの正月蚊の五月、是で一かんつきました……大阪市のもの。

## 遊戯唄の内。指遊びに関するもの。

◎一八二……この子と、この子と、けんかして、ちっころべえが、かもーて、おやっさんが、おこって、辨天さんの挨拶で、高々指でなかすんだ。

〔註〕両手を掌を内に合せず指頭を軽く打ち合せ歌詞が言ひ終ると、此の指の指頭を附け合せて次の指に移る。この子の時は人さし指、ちっころべえで小指、おやっさんはおやぢさんの意味で親指、辨天さんでは薬指、最後に中指又高々指とも云ふに終る。高々指でなかすんだのなかは喧嘩した二人の仲がすむ即ち仲直りが出来たと云ふ事と、五本の指の中間の指も濟んだ即ち遊び終ったの両意に軽くひっかけて有るのが面白い。

▲この子とこの子とけんかして、ちっころべが、かもて、おやっさんに叱られて、べっぴんさんのなかごとで、なかすんだ、なかすんだ……奈良縣北葛城郡五位堂村。

〔註〕此のなかごとは仲裁と言ふ意味を必ずもって居るのだろうが、奈良では好くない意味に用ひられて居る。其のなかごとばとは甲の人から乙の悪口を聞いて、乙の人に會ひ甲は君のことを斯う云ふ風に悪く言って居たぞと告げる事で、是をなかごとをいふと云ひ、此の性質の人をなかごと言ひと云ひ卑しめもし又警戒もする。

▲此の子と此の子と、喧嘩して、ちんころべたかーもて、おーやりさんがおこって、べっぴんの挨拶で、仲すんだ〳〵……奈良縣高市郡眞菅村。

◎一八三……いちがさした、にがさした、さんがさした、しがさした、ごがさした、ろくがさした、ひちがさした、はちがさした、ぶん〳〵〳〵。

〔註〕はちがさしたのはちは八と蜂の両者にかけて居る。甲が左の手甲を出し乙が一がさしたと右手で軽くつまむと、甲はにがさしたと、乙の右手甲をつまみ、次に乙は三がさしたと甲の右手甲を左手でつまみ、今度は甲が最下にある自分の左手をはずして四がさしたと言ふ。斯く順をおい八に至ると蜂が螫す眞似をして相手をさすと相手も負けずに同様にして両人共ぶん〳〵と唱へながら嬉戯する。

▲一がさいた、二がさいた、三がさいた、四がさいた、五がさいた、六がさいた、七がさいた、八がさいた、だ、ぶうゝぶ……三重縣(伊勢国)四日市市。

▲一がさいた、二がさいた、三がさいた、四がさいた、五がさいた、六がさいた、七がさいた、八がさいた、ぶんゝゝ……奈良縣北葛城郡五位堂村。

◎一八四……起きとるか、寢とるか。

〔註〕両手の指を掌中に組み合せ他の子供に内部の指が立て有るか、ねて居るかを尋ね、其の子供がねて居ると答へると、いや起きて居ると指を立て見せる遊びて有る。

◎一八五……あついか、つめたいか。

◎一八六……ぬるいか、あついか。

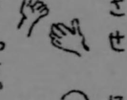
〔註〕是は指で風呂を真似た遊びの時にとなへる文句である。從って一八六のぬるいかと云ふ方がつめたいかと尋ねるより適當で有る。左右両手の人さし指と中指とを直交せしめて井形を作り他の子供に此の中に指一本を入れさせ紅さし指(又は藥指とも云ふ)と親指とにて輕くつめるそして「ぬるいか、あついか」と問ふと、指を入れた子供が「ぬるい」と答へる。すると一層強くつめるから、あついゝゝと連呼する。其の時につめるのを止めるが、意地強い子供になると仲々がんばる。「あついか」「いーや」「まだか」「まだや」「これでもか」「ぬるい」「そんなら、これでもか」「ちょっと、あつくなった」と云った調子で有る。

▲あついか、ぬるいか……奈良縣北葛城郡五位堂村。

◎一八七……させ ほせ かーらかさ、ひーとに、かすな、かーらかさ、たーとめ たとめと ゆて(言ふて)たとんだ。



〔註〕此の唄の所作は三段に分れる。第一段は「させ、ほせ、かーらかさ」、第二段は「人に貸すな唐かさ」、第三段は残りの分で有る。第一段をさせ ほせ かーらかさの四部に分ち左右の手を交互に圖示せる如く運動せしめる。




開いたのと第二段も人に貸すな かーらかさの四部に分ち左右の手を開いたまゝ、恰度掌の塵をふるひ落す如く上下部に擦り合せる。第三段は唄の節に應じて小指から親指へと指頭を順次合せて行くので有る。

◎一八八……べんけいが五條の橋を渡る時、ヤッコラサのサ、ヤッコラサのサと、ゆて渡った。

〔註〕此の唄の所作は前同様に手を活動せしめるものだが、ちょっと舞踊形式で容易に述べ難い。此の二つの唄は私の知らなかったものだが、奈良元林院町の青海樓抱藝妓弘子さんから昭和七年九月に聞き得たものだ。余り歌詞なり所作が児童向きでないので藝妓間に行はれて居るのでないかと尋ねたが、元林院町一帯の子供がやって居るとの事で有った。然し私は此の唄は元来は藝妓がなしたのを附近の子供が見習ったが或は教へて貰ったのだろうと考へて居る。夫れは寡聞ながら他の町では聞かないから。然し、俚謡、民謡、童謡の或るものの発源地が斯うした花柳界で有る事は見過す事の出来ないもので有ることを考へさされた。

◎一八九……せっせっせ、ひとつひよこが、こんべらむ志、たいろくないゝゝ、ふたつ船にはせんどさんが、たいろくないゝゝ、みっつ店屋のおもちやが、たいろくないゝゝ、よっつ横濱異人さんがたいろくないゝゝ、いっつい、しゃのくすり箱たいろくないゝゝ、むっつ、昔のよろいもって、たいろくないゝゝ、ななつ、なきみそ、ねぶりこ、たいろくないゝゝ、やっつ、やまかまし、ほらがい、たいろくないゝゝ、ここのつ、こじきが、おぼんもって、たいろくないゝゝ、とをで、とのさん、おんまにのって、たいろくないゝゝ。

〔註〕此の唄は女児が二人向ひ合って掌を胸前に打ち合せて遊ぶ時ぬにうたふ。たいろくふいない。たいのくないない。とも亦たいろくたいろくとも云ふ。此の意味は不明である。

▲一ツひよこに米のめし、たいろくぬんぬん、三ツ船には船頭さんが、たい……、三ツみせやにおもちゃが、たい……、四ツ横濱異人さんが、たい……、五ツ医者どんにくすりばこ、たい……、六ツ昔はよろひきて、たい……、七ツ泣く子にひねりもち、たい……、八ツ山にはけんけんさが、たい……、九ツ乞食がお椀もって、たい……、十でよ、殿様お馬にのって、たい……、十一巡査が劔吊って、たい……、十二にいさんが新聞よんで、たい……、十三酒呑、ひよろく、たい……、十四新年おめでとう、たい……、十五ごんべはんがたねまいて、たい……、十六ろーそくの火が消えて、たい……、十七質屋は娘さんで、たい……、十八濱寺、海水浴、たい……、十九くしやは娘さんで、たい……、二十に徳天皇萬歳々々……奈良縣山辺郡丹波北葛城郡五位堂村。

▲せっせ、あをやま どしょから、あをい鳥が、三ツ三ツ、白い鳥が、三ツ三ツ、そのあと、はいからさんが、靴をはいて、はかまはいて、すっぱらぱんのぱん……奈良縣北葛城郡五位堂村。

## 遊戯唄の内、雄部。

◎一九〇……開らいた〳〵、何の花開いた、蓮の花開いた、開らいたと思ったら、さぁーと又すぼんだ、すーぼんだ〳〵、何の花すぼんだ、蓮の花すぼんだ、すぼんだと思ったら、さぁーと又開いた。

〔註〕澤山の子供が環形に手をつなぎ合ひ唄に和して円を大きくしたり、小さくして遊ぶ。

◎一九一……きゅっきゅの、きゅべさん、かいる(蛙)ふんで、きゅ。

〔註〕紙鳶を揚げた時、糸をしゃくり紙鳶を躍るが如く動かせてうたふ。



◎一九二……いも虫、ころ〳〵、はーしにさして、ころ〳〵、後の長吉、ちょっと来い。

〔註〕澤山の子供が一筋に長く連り各々前の者の身体を持ち躓る。そして唄に合せて身体を左右に一体の如くに揺り動かし唄が終ると最後の者が長吉になり、ハイと返辞して最前の者の前に行き「バイ長吉が参りました」と言ふ風ふ遊び方をする。

▲芋蟲ごうろごろ、山椒蟲ごうろごろ、蠟燭ぽっくりこ、後の後の先次郎、何用でござる、夕の牡丹餅どうした、棚にあげて、鼠が引いた、その鼠を持って来い、(木の葉か何か持って来る)そんな鼠があるものか……東京市のもの。

▲芋蟲ごろ〳〵、あとの〳〵、先次郎、ゆうべ(昨夜)の鳥には、何呉れた、かい餅搗いて呉れました、それはよくした、先に立て……長野縣(信濃国)上諏訪のもの。

▲芋蟲ごろごろ、後の者一寸来い……三重縣(伊勢国)四日市市。

▲芋蟲ごうろごろ、後の長吉ちよいと来い……大阪市のもの。

◎一九三……こー(子)買おー〳〵、どの子がほしい、(名を入れる例へば武ちゃん)がほしい、いんで何食はす、赤まゝ(赤飯)トトのさい、トトに骨が有る、ようくよって、よろしい……。

〔註〕終り方は忘れてしまった。確か家へ連れ帰って何をさせるかと問ふと手習をさせると云ふ風で有ったが文句が定かでないから省略した。トトは肴、さいはおかずと一般に云ふ即ち副食物の事である。

▲子買ふ、子買ふ、子か買って何する、砂糖にまんじゅう、そら飯しゃ大毒だ、一ぜん二ぜんと、とうさいてあげませう、それがよければどの子が欲しい、あの子が欲しい、あの子は高い、いくらで賣るや、千両万両まん〳〵両、あんまり高けいから、ぱーしんへい〳〵、これくお待ち、何ごと

う御用御座る、文久一文でまけてやるから、買ってげ〳〵……栃木縣上都賀郡永野村上永野。

〔註〕此の唄は茅原榮重氏から聞いた もので有る。ぱーしんへいへいは何の事かわからないとの事である。

▲子を買ふ〳〵、何買うてやしの(養ふかの意)、唐土と饅頭とおこし米よ、其蟲大毒だが、どの子が欲しい……新潟縣(越後国)新発田町)。

▲子買はう〳〵、どの子が欲しや、誰さんが欲しや、つれてって何喰はす、二階座敷に虎の皮敷いて、饅頭三つすゑて手習さしとこ、手がよごれる、水で洗はす、水はちびたい、湯で洗はす、湯はあつい、そんならよいかげんにして洗はそ、そりや孫走れ、そりや孫走れば嫌ひぢや、ひぜんかき嫌ひぢや、飯食ひ嫌ひぢや、天神さんもったいない、お姫さん貰ふとこ、お姫さんの長持いつ来るな、三月梅の咲く時分……滋賀縣(近江国)長浜町。

▲子買ふ、子買ふ、子に何食はそ、砂糖饅頭、夫りや蟲の毒ぢや、とと(魚)に添へてまま(飯)、魚に骨が有る、飯に砂がある、夫れ選って食はそ、夫れが宜敷か、何の子が欲しい、一番あとの子……三重縣(伊勢国)雨宮領。

▲子買ふ、子買ふ子に何食はす、砂糖饅頭、そりや蟲の毒よ、茶漬に香の物、そりや咽が渇く、赤のまま(飯)にとと(魚)のさい、そりや骨が刺さる、しがんで食はす、小骨が刺さる、もしって食はす、それは宜ろう、何處々々履さそ、二階の隅で、チュッチュが引くワ、金襴緞子着せて寐かそ、それは宜かろ、早ほり籠に入れて嫁入さそ、チチカカカア……三重縣伊賀国のもの。

▲子買ふ、子買ふ、子に何喰はす、トトにまんじう、茶漬に香の物、それも宜かろが給金なんぼ(何程)、百十五文、あっちもこっちも商人で、何の子を上げまひョ、誰さん……お呉れ……京都府(山城国)紀伊郡鳥羽地方。



▲子買オ子買オ、どの子がほしい、いっち中の(誰々)が欲しい、いんで何食はす、蒲鉾三切れ、咽喉へ骨が立つ、毛抜で抜いて遣る、痛い、おまんの尻でさすってやる、こそばい、二階で手習、落る、下で手習、墨がつく、縁の下で藁打たさう、まめがでる……大阪市のもの。

▲子買オ子買オ、子を取って何にすりや、米のまま(飯)にとと(魚)副へて食はす、とと(魚)にや骨がある、拐って食はす、拐りや汚ない、洗うて食はす、洗や水臭い、醤油かけて食はす、それもよかろう、どの子がよけりや……備前国岡山市。

▲こかごこかご、どの子がほしいか、中の子がほしいぞ、(或はたの肥えた等とも云ふ)、中の子はやらん、端の子をやらう、おっともらった、(この次の句は任意に面白く謠ふなり)、鯛に骨なし烏賊こそ食はせう、それでも蟲の毒、こうこう(澤庵の事)三切れ、それも蟲の毒、金柑三つ、それも蟲の毒、千両箱三つ、それでも蟲の毒、こうこう(澤庵の事)三切れ、それも蟲の毒、金柑三つ、それも蟲の毒、千両箱三つ、それなら行かう、お姫様の長持や何時来るか、三月梅の咲く時分、いまき(湯巻の事)で、飛んで行かう……大分縣(豊後国)大分市。

◎一九四……かご〳〵十六文、江戸まで三文目、お姫さんの籠は、天神さんの籠と比べて見れば、天神さんの籠は、大きて重たい、深い川えはめよか、浅い川えはーめよか、とてもはめよなら、深い川えはめよか、浅い川えはーめよか、とてもはめよなら、左右にふり

ドンブリコ。

〔註〕比較的大きい子供(重に女児)が二人、向ひ合って両手を握り合ひ、其の上に子供を一人宛のせて此の唄をうたひ落す眞似をして遊ぶ。又大人が小児をあやす時などに一人の大人が両手で小児を仰向けに支へ、左右にゆり動かし此の唄をうたふ事もある。一種の子守唄としてもはたらいて居る。

▲十文ぢや〳〵、お嫁さんのかごは、十文ぢや、戻りは三文ぢや、深い川へはめよか、浅い川へは

めよか、やっぱり深い川へドボン……京都市。

▲かご〳〵十六文、此處から江戸まで三文目、江戸でもんぢりかへって、大阪で切れて、お尻がヒョッコリ出まして、何程出ました、瓢箪の底に、アツツをすえて、熱や悲しや、金ぼうとけ、金佛、深い川へはめよか、浅い川へはめよか、同じはめるなら、血の池へだぶりこ……京都府(山城国)紀伊郡鳥羽地方。

▲深い川へはめよか、浅い川へはめよか、おいどでっくり、でーました、さてもはめよなら、深い川へ、どんぶりこ……奈良縣(大和国)北葛城郡五位堂村。

▲深い川へはーめよか、浅い川へはーめよか、とぶん〳〵……奈良縣高市郡眞菅村。

〔註〕鳥羽のアツツはやいとの事で奈良でも大人が子供に對して云ふ時は「アツツをすえたろか」か「アツツをすえますよ」等云ふ。五位堂のおいどは尻のことで奈良でも同様に使い「あの女のおいど見よ、あのでっかいのん」等云ふ。五位堂のは遊戯に眞菅のは子守にうたふとの事。

◉一九五……蠟燭のえんまあき、まいても、まいても、未だまけん。

〔註〕澤山の子供が互に手をつなぎ合ひ一線にホリ其の一端を中心として渦巻の如く、くるくまわりながらうたふもので有る。

◉一九六……まい〳〵こん〳〵、ちり、ごん〳〵めーもうたら……。

〔註〕是は前のものと異り一個人が一円形を画いて何回となく走り廻るか、同一所で両手を一文字に肩並に張り何回も旋回する時にうたふ。此の唄の末尾不詳。目のくらむ事をめーまふと云ふ。唄の時はまふがもふに変って居るがまふの方が多く使用される。ちり、こんこんのかはりにきりこんこんとも云ふ。



▲まい〳〵こんぼ、きりごんぼ、目がまうたら死んで呉りよ……三重縣(伊勢国)四日市市。

◉一九七……ごーぢや、ごぢや、だーれ(誰)のとなりに、だれ(誰)が居る。

〔註〕だーれの所にまーちゃんとか靜ちゃんと人名を入れる。ごーぢやごぢやは普通にごぢや〳〵。と言って入り混ぜ、混雑等に使ひ是と似た言葉にいっしょくた(一所くた)と言ふのが有る。子供が一列に並び一同和してうたひ、唄が終るとオニが名さしをする。あたるとオニは言のあてられたものがなる遊びにうたふ唄で有る。

◉一九八……きょうの京の大佛つぁーんは、てんびー(天火か、天日か)いに、やーけてよ、三十三間堂は、焼けのーこった、あれはどんどん、これはどんどん、正面どなた、うしろー(後)にだれが居る。

▲京の京の大佛さんは、天火で焼けてなア、三十三間堂が焼け残った、アリヤドン〳〵、コリヤドン〳〵……京都市のもの。

◉一九九……高い山から谷底見ればよ、瓜やなーすうび(茄子)の花ざかりよ、あればどん〳〵、これはどん〳〵。

◉二〇〇……ぼんさん(僧侶の意)ぼんさん、どこえいくの、私はたんば(丹波)の篠山え、わたしもいっしょに連れてんか、おまへら(御前等)いったら、じゃまになる、このかんぼうず、糞ぼうず、うしろーに誰が居る、どっこいちごた。

◉二〇一……ぼんさん〳〵どこえいくの、わたし(私)はたんぼ(田圃)え稲刈りに、わたしもいっしょにつれしゃんせ、お前がくるとじゃまになる、このかんかんぼうず、糞ぼうず、うしろーに誰がいる、どっこいちごた。

▲坊さん〳〵どこい(行)くよ、わたしはたんぼ(田圃)に稲刈りに、私も一緒に行きませう、お前が

来ると邪魔になる、お寺のお寺の糞坊主、うしろの正面だれ(誰)……東京市のもの。

▲ぼんさん〳〵、何處へ行くの、私はたんぼの稲かりに、わたしも一しょに、つれらんせ、お前等行ったらじゃまになる、此のかん〳〵坊主、糞坊主、後に誰が居る……奈良縣高市郡眞菅村。

(註)一九八―二〇一の四つの唄は歌詞が異り唄の種類としては三種になるが遊戯の型式は同一で有る。其の方法は多数の子供が手を繰ぎ合ひ円形を作り唄をうたってゆるやかにまわる。唱ひ終ると停止する、円内に眼隠して立てるオニは自分の背後に居る者の名を言ひ当てる。言ひ當てられた者はオニの代をやる。間違った時には「どっこいちごた」の声の終るを待って更に言ひ換へる。二回とも言ひ當てる事の出来なかった時には唄を初からうたひ同様の事を繰り返へす。

◎二〇二……めんない、ちどり(千鳥か)、お手―手のなるほー(鳴る方)い。

▲めん〳〵めくら、手のなる方へ、子供が居てたら、どけてんけ……奈良縣高市郡眞菅村。

(註)めんない、は一般語即ち方言ではなくて此の唄に於て言われる言葉である。是は眼のないと云ふのがんに変轉したもので、從って眞菅村のめん〳〵は更に轉じたものと考へられる。居てたらは居るので有るなならばの意、どけてんけはのけて下さいの意。眞菅村の唄は二節に分れ遊戯の性質上前後の文意が矛盾して居る。此の唄は奈良童謡の二〇二と次掲の二〇三の唄の後半とを子供が殆ど無意識にくっつけたもので童謡考察上面白い問題を提示せられた氣持ちがせられる。子供間で稲へる遊戯名は「めんないちどり」で有るが、眞菅村では「めんめん鬼ごと」と稱して居る。遊戯法は一定の區域内で一人の鬼が手拭が何かで眼つぶしをして人を捕へようとする。多数の者は手を拍って鬼に自分達の所在位置をほのめかして逃げ歩く、而して逃げ迷って捕へられた者が代ってオニになる。



◎二〇三……こーこ(此處)はめくらの通りみち、子供が居るなら、どいてんか。

▲こーこはめくらの通りみち、子供がゐてたら、よけてんけ、いしなあったら、けってんけ……奈良縣高市郡眞菅村。

(註)此の唄は一種の遊戯唄には相違ないが、此の遊びをしようと云ってする遊戯ではない。子供の遊び仲間の誰か一人が思ひ出づる儘に此の唄を聲高にうたひ、軽く眼をつぶって仲間の群とか友達の居る方へわざと進む一種のたわむれに近ひものである。すると他の者も眞似て俄言目が澤山に出来る事になる。どいてんかはよけてくれの意で、よけないのかの時はどかんか、よけなさいの時はどきなあ、よける事をどく、よけよの時は強くどけと云ひ、よけよう、よけてやろうかの時はどけよかと云ふ。いしなは小石即ち礫程度のもので奈良ではいしなとは云はふ。磯城郡川東村海知(がち)ではいしなは子供が主として用ひ大人はごらと云ふ。磯城郡多(おー)村味間(あじま)ではいしなは礫程度のもので、ごらは石塊即ち拳大のものを言ふ。奈良ではごらとは言はないで石を付げていしころと云ふ。因に瓦の破片の事を海知ではセグラ、味間ではへグラと言ふ。海知は奥田勝雄氏、味間のは藤高忠房氏に聞いたものである。

◎二〇四……こーこ(此處)は何處の細道や、天神さんの細道や、ちょっと通してんか、用事のない者よーと―さん、行きは好いく、帰りはこわいぞ。

◎二〇五……ここはどこの細道や、天神さんの細道や、ちょっとしてんか、ようじのないもん、よーと―さん、此の子のななつ(七ツ)のいわいに(祝)、いけよ、いけよ、かえりにこわい、親に骨をくわすか、みをくわすか。

▲此處は何處の細道ぢや、天神さんの細道ぢや、ちいっと通して下しやんせ、御用のないもの通しません、この子のセっのお祝いに、お札を納めにまゐります、通りやんせ〳〵、行きはよい〳〵、帰りは怖い……東京市のもの。

▲こーこは何處の細道や、天神やーま(山)の細道や、一寸通しておくれんけ、行きしなよいけど帰りしな恐い、こはいながらも通らんせ……奈良縣高市郡眞菅村。

▲一寸通しておくれんけ、用のないのにようゝ通さん、げんげら山へ願かけに、行きしなよいけど帰りは恐い……奈良縣高市郡眞菅村。

〔註〕三人の子供が向い合って片手をつなぎ合ひ高くさゞし上げ門形を作ると他の一人の子供が其處を潜り越す可く出て来て問答的にうたふ。眞菅村のげんげら山の意味不明。

◎二〇六……いしやー(醫者)、どんぐり傘、ひがさ、ひがさもーついおんま(御馬)、おんまやりもち、よーやりもった、おもたければ、おろせ、かるければ(軽るければの意)、しやっしやげ(差し上げの事)、大阪屋の兵六さんに、よんべも、こぐって、またけさも、こぐりまひよ。

〔註〕此の唄は某夜間中學生が其の母から聞きとってくれたもので私も聞いた事がない。察するところ相當に古い唄らしい。此の唄に添ふ遊戯は明かでない。どんぐり傘も私は知らない是は後考に讓る。

◎二〇七……上みよ下みよ、茶か、水か。

▲上見よ、下見よ、天井見よ……伊勢のもの。

〔註〕子供の時は友達の持って居る物はつまらぬ物でもほしくてたまらなくなるものだ。其處で「それ、おれに、くれんか」と言ふと、氣の好い子供だったら、直にやろーと言ってくれるか又は



「隱(かく)れん」してやろーと云って、石の下、草の根、板塀の隙等に隱し「モーえーぞお」と云ふと、今迄目を閉ぢて待って居た者が、其の品物を探し求めにかゝる。すると「上見よ、下見よ」と喇したてる。隱し場所の近くになると「危い〳〵」と言ふ。未だ探しあてが出来ない時には「茶か、水か」と唱へる。是は未だ探す事を續けるか、もはや探し出せないから俺が出して見せようか」と云ふ意味に使はれる。若し探す事を續けようと思へば「水や」と答へ、探しあぐんだ時は「茶や」と云ふ。何故に此際茶か水か用ふるのか不明で有るが、此際の茶は茶の葉でなくて液体の茶を云ふのだろうと思はれる。而して子供ながら(創唱者が多分子供でないから推せられる)比喩的に言ったのでないかと思はれる。若し夫れが無理からぬ推定だとすれば子供の心理狀態を考究するのに有力で資料ある。

◎二〇八……おせおせ ごんぼ、出たもん、たにし。

〔註〕冬季になって寒さが強くなると、多數の子供が板塀とか腰板にもたれ重なり、互に押し合ひ、われがちに其の中にもぐり入らんとする時に唱へる唄である。かくして暖をとる。從っておせ〳〵は押せ〳〵で有るがごんぼは牛蒡ではない。多分是はごくらふる方言の轉訛ではないかと思はれる。競走の事をはしりあい(の走合い)、はしりくらべ(走比べ)と云ふが又はしりごくらとも云ひ、かわり番の事をかわり合い、又はかわりごくらとも云ふ事より して、ごくらには合ふの意味が有る。從って「おせ〳〵ごんぼ」の原形は「押せ〳〵ごくら」で有ったとの推定が出来る。次に出たもん田螺」は押し合って出された者は田螺の様だとの意味になるが、此處に何故田螺を持って来たのかと云ふ事になる。此處にも面白い比喩形式が表現されて居る事が喜〳〵くも感ぜられる。田螺は田から拾ひ上げて一度水煮をして後

貝殻からみ。即ち肉を取り出し是を食用にするのだが、此の時の状態を童謡に組み入れて居るもので有る。従って此唄の発生地は多分田舎で有って奈良ではなかろう。

▲だせ〳〵ごんぼ、出たもんたにし
▲おっしゃいごんぼ、出たもんたにし〉……奈良縣生駒郡伏見村正田、上村芳一氏より所聞。

◎二〇九……ばい(貝)がち、しょーにもばいが無い、チンポ切って、ばいにしょー。

〔註〕此の唄は私達の少年時にうたわれたもので近頃は聞かない。夫の理由は近頃ばいがちなる遊びを殆ど見受け兼ねる程度に減った爲めだと言へる。私の子供の時は正月には殊に盛で路傍と四ツ辻さては空地に石油罐(入れの木の空箱(今ならば林檎の木箱だが當時は電燈がなく一般家庭では洋燈を專用した爲めに石油が多用され従って其の空箱がよく手に入った)の上に畳莫産を中低に舟型にのせ、夫れにばいをまわし入れ、相手のばいと自分のばいとのかち合ひで出されたばいが負になる勝負遊びが盛に行はれた。ばいなる玩具には蠟ばいと、金ばいとが有った。初の内は蠟ばいばかりで、夫れはばい即ち或種の巻貝を半截にした内部に蠟(木蠟のみだった)を埋め、其の蠟中に鉛の小片がいくつか埋めこんで重心を取って有った。ばいの表面は赤、緑、青、黄等の色蠟をとり〳〵につめた單色物が有ったり、時には花模様とか色々の模様のつけられて居るのも有った。本當に美しい物で有ったので今玩具の標本にはしいと思っても先づ入手する事は出来ないだろーと思ふ。惜しい事だが是非もない。其の後金貝とて銅製の重いばいに蠟をつめた價の高い物が出たが、値段の点からして流行するに至らずして、鋭鉄のばいがあらはれ蠟貝はのかげは失せて失った。此のかなばいは中凹みにして赤青等の塗料を塗ったもので雅致は更になく玩具としての價値は急に低下した。



此のばいの形狀が陰茎の先端即ち亀頭に似て居るので子供は卑猥だと云ふ様な事などから起然番として否率直に唄にしたものだ。大人ならば陰茎の事を考へ又は陰茎と言へば、陰茎は泌尿器と考ふより直に生殖器と考へて終ふ。従って大人が聞けば卑猥な童謡だと言ふに違ひないが子供にすれば眞面目な童謡で有る可きだ。私は此の子供の心持ちが甚しくてならない。

◎二壹〇……あーがり目、さーがり目、くるっと廻って、にやーんの目。
▲上り目、下り目、ぐるっと廻って、猫の目……東京市のもの。
▲あがり目、下がり目、くるっとまうて、猫の目……伊勢国のもの。

〔註〕顔面遊びとも稱へるが其時の唄で有る。眼尻の附近を指で軽くおさへて眼尻を上げ下げしてうたふ。

◎二壹一……目カ一ちょんく、の十……東京市のもの。
▲目カ一ちょんく、の十……一ちょんくの十で平字が出来、合せて助平とホリ、色好みの者、あかたれ者を呼ぶに用ふ。

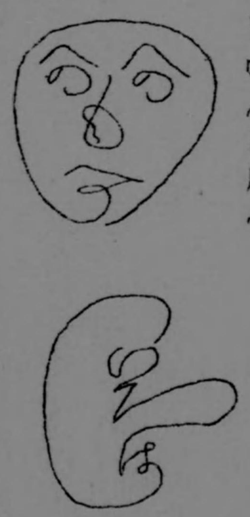
〔註〕是は書画遊の唄とも云ふ可きか。目カで助字が出来、一ちょんくの十で平字が出来、合せて助平とホリ、色好みの者、あかたれ者を呼ぶに用ふ。

◎二壹二……へのへのもへの。

〔註〕書画遊びの唄(の)でへは眉毛のは眼、もは鼻次のへは口、最後ののは顔面のことなる。

◎二壹三……いろは天狗。

〔註〕書画遊の唄でいろは。天三文字で天狗の右側面を画く。



# 雑談。

◎二壹四……山寺の、和尚さんは、鞠を蹴りたし、鞠はなし、猫をちゃん袋に、どしこんで、ポンとけりや、ニャンとなく、ニャンと鳴きや、ポンとける、ニャニャニャンのニャン。

△山寺の和尚さんは、鞠を蹴りたち、鞠はなし、猫をかん袋(紙袋)に、チョイと入れて、ポンとつきや、ニアンと啼く、ポコラポンとつきや、ニアーニアンと啼く……東京市のもの。

△山寺の和尚さんは、鞠を突きたし、鞠がなち、猫を紙袋へ詰め込んで、ぽんとけりや、ニャンと泣く、ぽぽんぽんと蹴りや、ニャニャンニャンと泣くよ……長野縣(信濃国)上田市地方。

△山寺の和尚さんが、鞠を蹴たくも、鞠がなく、猫を三匹、袋の中へ押込んで、ぽんとけりや、にゃんと泣く、ぽぽのぽんとけりや、にゃゝゝのにゃんと泣く、ぽんにゃん其處かい、ほい此處に……

長野縣(信濃国)上諏訪町。

〔註〕上田地方のものは手鞠唄とされて居るが奈良では手鞠唄とはして居ない。上田の唄に於て初に鞠を突くとして有るが、後ニケ所は鞠を蹴るになって居る。然て其の不釣合さがおかしく思はれる。

◎二壹五……臼ひき 豆ひき おーなが へったら帰って来い。

〔註〕細切を二人の子供が持って遊ぶ時にうたふ。おーなはおなかの略稱で其のおなかは腹の方言で児童向の方言ばかりでなく、一般婦人間にも稱へられる。

◎二壹六……イギリスにキリギリス、ドイツにゲンコツ、ヨーロッパに廣っぱ。

〔註〕一種の語呂合せで有る。キリギリスとは一般には言はふいで、キリスと言ふ。廣っぱは廣い場所の事で有る。



◎二壹七……△△さん、おーはいり、はいよろし、いっぷく、ちきゝく、でてちょうだい。

◎二壹八……△△さん、おーはいり、はいよろし、あたまが、おをきて、はいれません、うらから、まわって、おーはいり。

〔註〕△の所えは人名を入れる。両唄とも問答体裁に出来て居るが、實際は問答するのではなくて一人の子供がうたふので有る。いっぷくは休みいこふの意で、一服で有る。ちきゝくはぢきに即ち直にから変化したのではなかろうかと思はれる。從って二七の唄の意味は△△さん入って一服しなさい、そしてお休みが済めば直に出て行きなさいとなる。

◎二壹九……僕は軍人大好きよ、いーまに大きく、なったなら、勲章つーけて、飯さげて、おんま(馬)に乗って、はいどーどー。

◎二貳〇……僕は軍人大嫌い、いーまに小さく、なったなら、おかちゃんに抱かれて、乳のんで、一銭もろをて、なんど買いに。

〔註〕二九の唄は幼稚園か小學校で教へられた唱歌だろうが其の反對の唄も得意氣にうたふ子供の心持ちが面白い。なんどは間食物の事で重に菓子を意味する。此の言葉は「お母さんなにか食べ物を下さい」のなにかが變じたもので有る。

◎二貳一……きーしゃ(汽車)、ぽっぽ、さんじゅっせん(三十銭)、けーむり、だして、ごーじゅっせん(五十銭)。

◎二貳二……きーしゃ、ぽっぽっぽー、三十銭、けーむり吐いて五十銭。

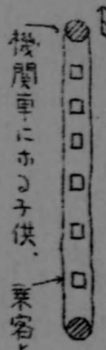
◎二貳三……きーしゃ、ぽっぽー、三十銭、けーむり吐いて、五十銭、ひっくりかえって、いーちえん(一円)。

◎二貳四……汽車、ぽーっ、どっしん、しんゝく、どっしん、しんゝく、ぽーっ。

〔註〕私達の子供の時には三一二三の様な唄は言はなかった。私の家の子供達は近頃こうした唄

を唄うた

を歌っては遊んで居る。又三つ子を脊負った母親が此の唄を言っては道を歩いて居るのを見聞する事は稀でない。私の子供時に子供が寄り合って汽車ごとをする時には長い藁縄を結びわなにして先頭と末尾とに二人の子供が入り、先頭の子供が機関車をつとめ乗客となる子供達を中部に入れて走り先頭の子供が二三四の唄をとホへ両手を腰部附近に折り曲げてしきりに動かしピストンの真似をしたものだが近頃はこんふ情景は見られない。




◎二貳五……一に二に當麻のまんでら、長谷では觀音、奈良では大佛大きな塔。

〔註〕當麻は奈良縣北葛城郡當麻村の當麻寺の事で、まんでらは極樂曼荼羅縁起の意だからまんだらの轉訛で有る。大きな塔は東大寺所屬のものではなくて、興福寺の五重の塔を言って居る。

◎二貳六……ひにふにら、ららこがち、ちんがら、こけこがとお。

▲ひにふにら、ちんがらほけきよのほんがんじ(本願寺)……石川縣(加賀國)能美郡西尾村尾小屋。

〔註〕二二五及び二二六の両唄は同形式の唄だが何を意味して居るのか其の他の事も明らかでない。尾小屋の唄は今から十四五年も前に私が尾小屋鉱山に俸職して居た時に當時の子供が盛にうたって居たもので有る。此の唄はどうも佛教に関係が深かりそうだ。

◎二貳七……西郷隆盛りや、いわし(鰯)か、じゃこ(雜魚)か、鯛に追はれて、にげてゆーく、おやまか(娼妓の事)、ちゃんーりん、ひっくりかへったら、ばっきん(四訓金)か、ばっきんくろたら、ちょうえき(懲役)ぢや。

〔註〕此の唄は童謡と云ふより寧ろ民謡と言った方が適當で有るかも知れない。是は要女の母から聞き得た資料で歌詞よりしても察し得られる如く明治の初期に流行したものではないか。從って今は全く絶えて聞かない唄で有る。「鯛に追はれて」の鯛はかけ言葉として働いて居るりだろうと思はれるが、夫れが隊で有るかどうかは私としては言ひ切れない。おやまは関西地方特有の言語で娼妓即ち女郎の事で有る。此の語源に就いて考察したいと思ひながら未だ適當な資料が集まらない。ちゃんりんは不明。ひっくりかへるはこける或は倒れるの意。一月元日の唱歌に「松竹たてて門毎に、祝ふ今日こそ楽しけれ」と有るのは子供達は「まったけひっくりかえって大騒ぎ」とたわむれ半分に唱ふ事が有る。又ひっくりかえすの時はこかす、たをすの外に裏返がえす即ち裏をむけると意味にも使用される。然し此の唄では唱妓がたをれる、娼妓が寝る、即ち娼妓が春を売ると云ふ意になって居る。

◎二貳八……大阪し(市)、し(四)丁目、しおや(塩屋)のしん(新)助さん、しお(塩)し(四)升、しがんで、しろ(白)目むいて、し(死)んだった。

▲大阪市心齋橋四丁目、塩屋のしぶんぼ、塩四升ぬぶって、白目むいて、死んだげな……奈良縣磯城郡川東村。奥田勝雄氏より聞いたもの。

〔註〕しを多く使った唄で有るが、奈良の物は不完全な物で有る。報告者は心齋橋か新町かを大阪市の次に入れる可きを落し忘れたのではないか。しがむは噛むの意で有る。川東村のしぶんぼは奈良ではしぶんちと云ふ。吝嗇家の事で有る。

◎二貳九……のり(糊)やのノー、おぢさんノー、のりくてノー、死んだったノー、かわいそやノー、そーしきノー、おくったろかノー。

〔註〕の盡しの唄で有る。奈良では大人は語尾にのぶりのーを餘りつけないが児童は比較的多くのーを使用する。

◎二参〇……ごーや(高野)、ごーぼー(弘法)大師、このこー(此の子)を抱いて、ごー(粉)ひいて、このこー(此の子)のめー(眼)え、ごー(粉)入って、こんど(今度)から、このこーを抱いて、ごーひこまいの―。

△こうごうだいし、ごーひいて、このこ(子)をだいて、このこの目へ、こうはいて、こんどから、このこをだいて、こうひかんとこ……奈良縣高市郡眞菅村。

〔註〕こ盡しの唄で有る。此の唄を口早に何回となく繰返へしう左ふと終には口籠った左り、妙な事を言ふ様になり、居合はす者が笑ひ興ずる一種の競技的な唱え唄で有る。此の唄の中にあるこん。ど(今度)は現在を言ひ表わさないで未来、即ち此の次からと言ふ意味を示して居る。唄ばかりでなく日常の場合にも盛に誤用して居る。然し正しい用法も無いではない。次に其例を。

こんどから注意しますから此の度はお許し下さい……誤用。

此の方はこんどこちらへ赴任された長谷川君です……正用。

今假に誤用とは述べたがこんどは今度ではなくて、来る度から若し轉じた言葉だとすれば其の語意には誤がないが漢字の振當方がよくないと言はねばならぬ。

◎二参一……たりなりかり、ありすりぼりかり。

◎二参二……おりめりこり、しりたりいり。

〔註〕近頃はどうか知らないが私の子供の時には言葉の一字毎にり。をつけて言ふ事が流行した。是は笑談味が含まれて有ったり、言ひにくい事を述べる時に言ったりする。従って型の定まった童謡とは性質を少し異にして居る。二三一のものは「田中あすぼか」で二三二は「おめこしたい」で有る。二三二は例示しなくとも思ったが卑猥の言葉は露骨に言ひ表わし難い心持は子供ながら有るので一種の隠語形式を使用して居る例として特に掲げる事にした。



◎二参三……京の三十三間堂の佛のかずは、三万三千三百三十三体あるとは、誠のじょーかいな。

〔註〕此の唄を一息に何回言ひ得るかを互に競ひ合ふので有る。殊に三万三千三百三十三体が言ひよどみ易い文句で有るのに妙味が出て来る。終に有るじょーの意は明かでない。

◎二参四……うし(牛)のおー―(尾)。

〔註〕此の物を童謡扱ひにするのは少しおかしな氣がするが、まづ掲出することにした。是は上唇と下唇との中程を両手の指でつまんで、「牛の尾」と何回か繰り返して云ふと、「牛の尾」とは聞えないで「牛のぽぽ」と聞える。其處で子供はやりくと言って笑ひ合ふ。ぽぽは女陰の事で下卑た言葉とされて居る。

◎二参五……トケヤノポンチ、チンポノヤケト。

◎二参六……タケムラマサケ、ケサ(今朝)マラムケタ。

◎二参七……コメ(米)ヲタベ(食べ)ナシ、シナベタオメコ。

〔註〕是も童謡としてはおかしなものだが、童謡に準ずるものと考へて差支へは有るまい。此のものは二句にわかれて居て主句は第二句で第一句は從句で有る。いづれか一の句を単に讀めば他の句となり、いづれも卑猥な文句で有る。良家の男児の事をぽんちと呼びぽんちとは言はない。然し此處ではチンポと言はねばならぬ爲に特にポンチと言って居る。二三六のマサケも別に意味の有る言葉ではない。

◎二参八……トコノマノコト。

〔註〕「床の間の琴」で床の間に飾としてもたせかけた琴の意で別に唄ではない。是は前のものと異り唯一句だけで有るがいづれから讀んでも「床の間の琴」となる。

◎二参九……一の木、二の木、三の木さくら、五葉の松、柳、柿の末に、とんび(鳶)もとまれ、鳥もとまれ、鳥の首は、ぬぢあがった首で、ちょーろに見せたら、ちょーろはがんち、つちのこは槍持ち、ょう槍持った銭百やろぞ、百はいらん、三文たんせ、一文であめしょ、三文で女房、女房は誰れや、こんにゃくやのおげん、おげんに子が有る、みめさへよければ　ヨボ〳〵　ヨボ〳〵。

▲そらはがんち、土の子は　やーりもち、ょうやりもった、今度の市で、あまい買ふて、死にませう

……奈良縣高市郡眞菅村寺田。

〔註〕此の唄は少し古いので今は餘り聞かない。從って何の時にうたわれるのかもわからぬ。ちょーろは不明、がんちは片眼めくらの事。つちのこも不明だが眞菅村のものに崎山氏が土の子と篠畳いて居られるが多分當を得たものとは言へないだろう。三文たんせのたんせも不明、あめしょもわからぬ。「みめさへよければ」は容貌が好いならばの意に違ひない。ヨボ〳〵は呼ぼう〳〵で呼び寄せようの意味だろう。

◎二四〇……おげーん何處え行く、油買いに、酢かいに、油屋のかどで、あーぶら一升こーぼして、その油どーした、犬がなめてそーろ、その犬どーした、叩き殺してそーろ、その皮どーした、太鼓に張ってそーろ、その太鼓どーした、あっちゃの宮でも、ドン〳〵、こっちゃの宮でもドン〳〵ドン。あんまり叩いて、叩き破ってそーろ。

▲寺の鐘割れた、なんぼにわれた、三つに割れた、其の鐘どうした、ふるて屋に賣った、そのでん(錢)の事)どうした、油一升買う た、その油どうした、犬みたなねぶりよった、その犬どうした、太鼓にはった、その太鼓どうした、お宮さんへあげた、あっちの宮でもどんどこどん、こっちの宮でもどんどこどん……奈良縣高市郡眞菅村。



〔註〕此の唄は如何なる時にうたふか知らない。然し相當の古さは有りそうだ。唄中のそーろはそうろで候で有った事は明白だ。眞菅村の唄中に在るふるて屋は古物商の意で奈良でも使用する言葉だ。而して古物商の意にも使ふが、ふるて屋は古き衣服類を賣る店に主として用ひる。店の商品をふるてものと總稱する。奈良では古物商の事を主に道具屋と云ひ新らい家具を賣る店の事は家具商とか或る場合には指物屋と云って、道具屋とは餘り言はぬ様だ。

◎二四一……あか、べー。

◎二四二……あか、べんてん(辨天)さん、しり、かんのん(觀音)さん。

〔註〕二四一は謡らしくないが二四二と同様の場合に使用する。悪心たれ小僧が友達に何か所持せる品物を請はれるか、或は自分から「是をやろーか」と言って友達が「ウン〳〵くれ」と言った時に、其の品物を與へずに、人さし指で下瞼に指頭をあて、べカコをして「あかべー」と云ふか、同様にして「あか辨天さん」と云ひ尻を友達の方に向けて妙に突き出し、掌で輕く三度叩いて「尻觀音さん」と言ふ。

◎二四三……上げとこ、下げとこ、ぽっぽへ、ない〳〵、しょ。

▲上げて下げて私のもの……駿河國のもの。

〔註〕此の唄は前と同様に何か品物を友達の誰かにやろーと言ひ、其の者がくれと言って手を出すと、其の時手に持った品物を上げ下げをして後懐に入れて終る。其の動作に感じてうたふ唄である。上げとこは品物を上げ下げをして居る意と、上方にさし上げる意とにかけて居る。とこは置こうの意が有る。ぽっぽは懐の児童語でない〳〵はしまうの児童語で有

る。

◎二四四……いっ(一)たん聞いとこ、にい(二)だん聞いとこ、三だん目にしゃべろ。

〔註〕此の唄は童に女児にうたはれる。いったんは一ぺんとか一度の様な意味が有る。何か友達から秘密に類する話か又は可笑な事を聞く間だけ默って聞き、聞き終ったら、「やあー おかしっ」と言って、是に續いて此の唄を云ふので有る。

◎二四五……出て来る敵は、皆、皆、殺せ――。

▲出て来る敵はみなゝ殺せ――……奈良縣高市郡眞菅村。

〔註〕此の唄は主に男児のうたふもので有る。眞菅村の註釋にげっしんをすると出て行く時に云ふとなって居るが、私には此のげっしんとは何の事かわからない。

◎二四六……お山の大將は、わしひとり。

◎二四七……お山の大將は、わしひとり。後から来る者つき落せ。

▲お山の大將は己一人、後から来る者つき落す……東京市のもの。

〔註〕東京の註釋は土の盛り上った頂に駈け上って群童を瞰下しつゝ手を擴げて唄ふとなって居る。奈良にても同様に唄ふ一種の遊戯唄で有りするが二四六の下部の省略された方を多く云ひ、又お山と叮寧な言葉使ひもするが、單に山の大將は……と云ふ者も少くない。後から来る者つき落せは二様に解釋せられて頗るあいまいな言葉で有る。即ち後から来る者をつき落せと、後から来る者はつき落せの二様で有る。いづれも命令的な述べ方で文意からして考へると、後から来る者をと云った時は第三者に丘上の子供が丘に登らんとする子供を引きおろせと命ずるのに解せられる。後から来る者は。の時には



後から登って来る者は山上に居る俺を突き落してみよ、仲々落す事は出来ないぞと云ふ意味に解せられる。然し東京のものになると山上に居る俺は大將だ、從って後から上って来る者が有れば突き落してやるから、登って来るならば来てみよとなる。仍って前者は挑戦的なのに對し後者はいかつ的で有る。児童の心理狀態から察すると東京の唄が本体で有って奈良の唄は變形体態であろう。

◎二四八……あたっても、知らんぞ、さーき(先)に言ふたるぞ。

▲あたり御免、どいとって、當って悪るけりや、どいとって……伊勢国のもの。

〔註〕石又は其の他の物を投げる時か、棒を振り廻はす時にこう唄ふのだが、どちらかと云へばわざとあて、仲間内の誰かを泣かせる。子供の親が叱ると他の仲間友達を顧みて初にことわって有た事に同意を求めると言った、責任逃れの言ひ草で子供ながら油断のならない横着さで有る。

◎二四九……饅頭こーたら皮やるわ。

◎二五〇……柿こーたら種やるわ。

〔註〕是は童謡と見るより戯言とか言ひ草と考へる方がよいかも知れない。

◎二五一……東西(とざい)来たゝくゝみなみ。

〔註〕東西は東西屋又はとうざいやさんと言って居る。地方では披露屋とも呼んで居る所も有るうし、又チンドン屋とも呼んで居る。奈良ではそうは言はない。奥田勝雄氏の話で磯城郡川東村海知では單にチンドンと云へば葬式の事で有るとの事だ。私の子供の時には先づ樂隊ぶれはなかった。凡そ東西屋のみで有ったが今もすたらないで行はれて居

居る。東西屋は四辻か又は適所に停立していそがしく又賑しく喋し、人が集って来ると、口切りにトウザイ〳〵と大聲を張り上げて次に要件を語り終に御披露(引張る)と言ひ終って立ち去る。名稱は此のトウザイに発して居る。然し、トウザイの意味なり、東西ホる文字を當て、好いか悪いかは後時に讓る。未だ、は北にかけ、みなみは皆の者見なよの意を皆見として南にかけて居る。要は東西南北を言ひ表はして居る。

◎二五二……玄米パンのホヤ〳〵。

〔註〕麺包箱を自轉車に荷付けして、トタン制衣のメガホンを口に當て、ゆるやかに斯うした賣聲で玄米パンを賣りに来る者が有る。子供は直に此の賣声を眞似て唄ふので有る。此のホヤ〳〵はパンの出来上って間もない事の形容になって居る。然し一般にはそうした場合の言葉としてはホコ〳〵とかヌク〳〵と云ふ言葉を使ってホヤ〳〵とは云はない。此の商人は他国の移住者で有るか、出まかせ口調を使ったかのいづれかで有る。

◎二五三……蜜かん金かん酒のかん、角力取は裸で風邪ひかん。

〔註〕此の唄はかん盡しの唄で別に他に意味はない。

◎二五四……せんちの火事で、やけくそ(焼糞)や。

〔註〕是は考へ方によると戯言とか、言ひ慣しと取れるが、是を言ふ時に一種の音調を帶び、又二三回繰り返へして唱へる場合が多い。其の點からして童謡として取り扱っても差支へ有るまいと思はれる。此の唄を云ふ子供の其の時の心持は大小の差異こそあれ自暴自棄の狀態に置かれて居る。せんちは便所のことで、せっちん(雪隱)より轉訛したものだろう。せんちはどちらかと云へば上品な言葉と考へられて居ない。



やけくそは焼けたる糞即ち焼糞ではない。自暴自棄の意味が有り、單にやけともいふが、くそが付くと其の意味が強調される。「やけや、もー一番勝負をしよー」「やけになったら何遍やっても勝てんぞ」など云ふ。

◎二五五……しびーれ京へのぼれ、京のおばさん待っててや。

◎二五六……しびーれ京へのぼれ、今日は京のまつり。

〔註〕長らく坐って居ると足なり脛部なりがしびれて自分の足か人の足かわからなくなる。是をしびれと云ふ、殊に子供が食事の時にたこし易い。しびれが出ると子供は此の唄をうたひながら足を叩き又さすって、しびれを治す。私の子供の時は二五五の物を唄ったが、私の子供達は寧ろ二五六の方を唄って居る。

◎二五七……槌の子や、豆の粉や。

〔註〕正月の注連縄の内即ち一日から十五日までに死人が出ると其の年内に其の町内で七人以上の人が死ぬから木で小形の横槌を七個作り是を縄の一端に結びつけ、町内の各戸から一人宛出て其の縄を町内中引きづり廻り七回是を繰り返へし最後に其の槌を河か何處かに捨てい、ふりかへらずに一同が家に帰へるとよいと言はれて居る。其の小槌を引き歩くのに子供達は喜び勇んで大人に交り出る。其の時に此の唄をうたふ。然し何故こう云ふ歌詞で有るのか甚だ明瞭でない。

◎二五八……去年のヤヤと今年のヤヤと、ヤヤどし ばあー。

△内の赤子ととなりの赤子と、赤子同志バー……奈良縣高市郡眞菅村。

〔註〕此の唄は一種の子守唄である。ヤヤは又はヤヤコとも云ふ、赤ん坊の事で有る。是は子守を

して居る者が此の唄をうたひながら赤ん坊の顔をつき合せて、赤坊をよろこばせる。

◎二五九……猫が鼠とりや、鼬がわらふ、チョン〳〵。

〔註〕部類わけの動物唄に入れるもので有る。如何なる時に唄ふか詳かでない。

◎二六〇……達磨さん〳〵、にらみっこしようか、笑たらあかんぞ、ウン。

〔註〕此の唄は遊戯唄で有るが先に書き漏したので此處に記すことにした。にらみっこはにらみ合ひの意だが、奈良地方ではこうした語法は普通使用されない。此の語法からして考へると此の唄は他より移入したものでないかと思はれる。あかんは好くないと云ふ意味になって居るが其の他色々な意味に使はれる。「あかん奴やなア」と云へば弱い奴とか、意氣地のない者となり、「モーあかん」と云へば駄目とか、持ちこたへる事が出来ないと云ふ事になる。遊び方は二人の子供が對坐して此の唄を共にうたひ終るとウンで互に無言で顔又は身振り色々な事をして相手を笑はせようとする。そしてどちらか其が笑ふと、其の者が負となるので有る。

◎二六一……ふく、とく、びんぼー、しょたい、かねもち。

▲ふく、たーく、たーから、びんぼ、しょたい、かねもち……奈良縣北葛郡五位堂村。

〔註〕即ち福、徳、貧乏、世帯、金持となるので、五位堂村のたーくはとくの変化だろう。たからは奈良のものにはないが是は寶に違ひない。此の唄は着衣の數を數へる時にうたひ、胸部の打ち合せ場所で外方から數へ襦袢に及ぶ。金持ちに相當する時は喜び、貧乏に相當する時はしょげる。こうした單純な事柄では子供の有るが子供の心にはかなりの喜怒哀樂として現はれて来る。



奈良の童謡を二百六十一種採録する事が出来た。然し未だ幾つかの遺漏が有ったり、又掲出した童謡の内にも不完全なものも有る。是等は猶注意を怠らずに拾ひ蒐めたり、更に完全なものにまで仕上げたい考へで充たされて居る。

分類に就いても便宜な方法により幾種類かに分別したものの、補遺的の童謡は止むを得ず雑部に繰り入れなければならなくなり、少し不統一で有ると考へられはしまいかと心配せられてならない。

羅列せられた童謡は一の童謡集に過ぎない。何時、誰が見ても童謡にもられたる内容を首肯し得られるには、註書に待たねばならない。此の意味に於ても註書は童謡研究には先づなくてはならないものだが、兎角系統的でなく唯雑然と並べたてたに過ぎない感がせられる。従って今少し整頓し一層親切に註釋をする要が有ると思ふ。又方言の説明も出来るだけ精細にしなくてはなるまい。

「奈良の童謡」と題名を附したが「奈良の童謡を中心として」の意味で童謡研究の一端ともならうんかとの存念で有った。夫れで比較研究にもとの考へからして、類型の童謡を添記する事に努めたが、其の類例が甚だ乏しいのが遺憾で有る。然し是を比較研究の資とし、且つ童謡分布の調査への料となす程度までに築きあげるのは仲々容易なことでは有るまい。

前項のは横への擴がりを考へたのだが縱への延びとしては、童謡毎に大略の時期(年代)を指示し得らるれば、其の土地即ち奈良に於ける童謡の推移を知り得られ、時世相をも窺知し得て一層の興味をそゝるわけだ。けれども是は難事で有る。

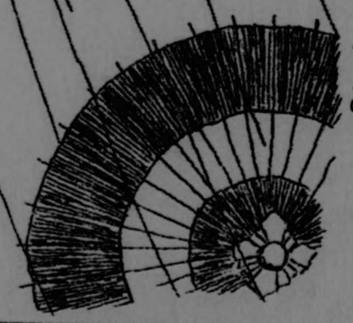
前述の如く本輯は未だ不備な點が決して少くはない。夫れで後日是が訂正增補しなければならない事を今から豫期して居る。其節は今よりも一層に價値あらしめたいと念願する次第で有る。

（此の項は昭和八年八月廿五日しるす）。

## 春雨くづ売

春雨が　去と　そゝ中を　もくろあんつくる。
　　去と　二人で　一とつ　傘
　　寄りつ添いつ　去っくりと
　　離れず歩む　そゝ　次女
人に見られて　羞ましと
　　嬉しいなぞら　はづかしく
やがて連れ添ふ　日ゞ待たる
　　サアー　夢ない夢ぢや　ないかいなア
　　サアハサ　何んでもよいわいな——

（昭和八年四月九日）





## 默魯庵漫録の内容。

第一。一、水谷神社と陰陽石。
　　二、若草山山麓の陰陽石。
第二。三、觀阿道人と其の墓石。
　　四、水谷堅動記。
第三。五、興福寺の繪馬目録。
第四。六、奈良木辻遊廓の文献。
第五。七、奈良奉行所同心呂出覺書。
　　八、津のつく地名調。
第六。九、八拾五歳の姙娠。
第七。十、奈良の方言。
　　十一、吉野山地を語る。
　　十二、大和の山嶽一覽表。
　　十三、荒神嶽のお辰墓の傳説。
　　十四、登山隨想。
第八。十五、新藥師寺の印と隆聖師。
　　十六、壹錢九厘屋のこと。
　　十七、だくりゐとつ。
第八。十八、浮世繪に就いて。
　　十九、看板文字の事。
　　二十、草津と木津。
　　廿一、アイヌ語彙に就いて。
第九。廿二、奈良木辻遊廓藝娼妓靈名記。
　　（其の他未詳）
第十。廿三、お亀ヶ池の傳説。
　　廿四、お産の輕くなる禁厭。
　　廿五、奈良市多門町の事ども。
　　廿六、歌川国芳の挿繪本目録。
　　廿七、奈良の小唄。
第十一。廿八、ジャンノ〳〵火の傳説。
　　廿九、大阪の手鞠唄。
　　卅、名古屋の手遊唄。
　　卅一、安産の祈願。
　　卅二、二月堂の一扁額に就て。
　　（其の他未詳）
第十二。卅三、續奈良の方言。
第十三。卅四、奈良の童謡。

912
6

製本控
912 圓 6 號 同第 號
書名 寫生畫帖 第 年 月 日
著者 行路正雄 編
受入 年 月 日 部 冊
備考



第十三・世五・春雨くづし

## □繪類。

興福寺の繪馬に画ける唐獅子……三
フレデリック・スタール博士の手蹟……三
奈良木辻遊廓の古畫……四
東大寺塔頭眞言院の朱印影……五
奈良元林院檢番の藝妓の傳票……六
ハンシ山より眺めたる高見山……七
東大寺法華堂執金剛神拜觀券……八
奈良新藥師寺の印影……八
奈良檢番の座仲居の傳票……九
京桝屋の燒印……九
奈良木辻遊廓取締の古印影……九
奈良檢番のビラ紙……十
奈良足袋レッテルの一種……十一
奈良局の遊覽記念スタンプ……十二
奈良の新聞題字……十三

## 編輯記

◇こんな採るに足らぬ冊子一つを作るに一年以上も日時を要した。顧みて自分の努力の足らなかった事を一ツ〳〵と味った。たとへ此の冊子にの力を注いでみたとしたところで私の性分としてはそんなに捗りもせない事だろうが。まア隙々にはもっと續けてやってみよう。

◇此の冊子は後援〳〵て下さる意味で八拾錢戴きたい。

◇昭和八年一八月廿六日作りあげた。

◇奈良市東笹鉾町世二
新井勝正雄

◇振替口座は
大阪第三四九一八番

912
6